

上
園
遺
跡
10

上園遺跡 10

～第3・4次調査～

大野城市文化財調査報告書 第198集



大野城市文化財調査報告書
第198集

大野城市教育委員会

2022

大野城市教育委員会

かみの その
上園遺跡 10

～ 第3・4次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第198集



2022

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の一角にあたり、北側に大城山、南側に脊振山系が広がる縦長の市域を有しており、その形はよくヒョウタンに例えられます。

今回報告する上園遺跡は上大利3丁目を中心に広がり、これまでの調査では、主に古墳時代の集落が見つかり、牛頸須恵器窯跡に関わる須恵器生産集落であったと考えられています。

本書で報告する第3・4次調査は、住宅建設及び道路拡幅を契機に調査が行われたものです。調査では古墳時代から平安時代の遺構・遺物が見つかりました。発掘調査で出土した遺物の中には10世紀から14世紀にかけて朝鮮半島にあった高麗で作られた青磁椀が見つかり、本市では初めての発見となりました。

上園遺跡のある上大利3丁目周辺は、昭和時代の中頃まで水田や畑が広がるような場所で、この平地をさらに南に進むと上大利小水城があります。上園遺跡周辺には、西側に隣接する本堂遺跡や、小水城周辺遺跡でも平安時代の遺跡が確認されており、これらは中世の大利村にあたり、高麗青磁の発見で博多・大宰府との交流も考えることができるようになりました。

中世村落の調査成果は、明治22年に11カ村で発足した大野村の原形を明らかにするものです。このことが大野城市の歴史をさらに厚みのあるものとし、本報告がその端緒となることを期待しています。

最後になりましたが、事業者をはじめ地元の方々にご協力とご理解をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した上園遺跡第3・4次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が実施した。
3. 整理作業は、大野城市教育委員会の単費事業として実施した。
4. 本書における遺構の分類番号は、SA：柵・土塁・塀、SB：掘建柱建物、SC：竪穴住居跡、SD：溝、SE：井戸、SF：道路状遺構、SH：広場、SJ：甕棺墓、SK：土坑、SP：ピット、SR：祭祀遺構、ST：古墳・木棺墓・土坑墓・石棺墓、SX：性格不明遺構とした。
5. 発掘調査は、徳本洋一が担当した。
6. 遺構写真は、徳本が撮影した。
7. 遺物写真は、写測エンジニアリング株式会社（牛嶋茂）が撮影した。
8. 遺構図面の作成は、大野城市教育委員会が行った。
9. 遺構図の方位は方位北を表す。
10. 遺物実測図は、古賀栄子・小嶋のり子が作成した。
11. 製図は、小畑貴子・篠田千恵子が作成した。
12. 拓本は、古賀・小嶋が作成した。
13. 観察表は、小嶋が作成した。
14. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』を使用した。
15. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
16. 本書の執筆並びに編集は石木秀啓がおこなった。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の結果	7
1. 第3次調査	
(1) 調査概要	7
(2) 遺構と遺物	7
(3) 小結	16
2. 第4次調査	
(1) 調査概要	17
(2) 遺構と遺物	17
(3) 小結	39
IV. まとめ	49
1. 中世大利村について	49

図版目次

図版1	(1) 第3次調査地東半部全景 (南西から)
	(2) 第3次調査地西半部全景 (北東から)
図版2	(1) 第3次 SC05完掘状況 (南西から)
	(2) 第3次 SD14・15完掘状況 (南西から)
図版3	(1) 第3次 SP17土層断面 (南東から)
	(2) 第3次 SP17完掘状況 (南東から)
図版4	(1) 第3次 SX06完掘状況 (北西から)
	(2) 第3次 SP69検出時遺物出土状況 (南東から)
図版5	(1) 第3次調査前現況 (南西から)
	(2) 第3次調査風景 (北東から)
図版6	(1) 第4次調査地北半部全景 (南から)
	(2) 第4次調査地南半部全景 (北から)
図版7	(1) 第4次 SD01土層 (南から)
	(2) 第4次 SX01完掘状況 (東から)
図版8	第3次調査出土遺物①
	第4次調査出土遺物①
図版9	第4次調査出土遺物②
図版10	第4次調査出土遺物③

挿 図 目 次

第1図	上園遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	3
第2図	上園遺跡調査地位置図 (S=1/3,000)	6
第3図	第3次調査地遺構配置図 (S=1/200)	7
第4図	第3次 SC05遺構実測図 (S=1/60)	8
第5図	第3次 SC05、SD14・15出土遺物実測図 (S=1/3)	9
第6図	第3次 SP17遺構実測図 (S=1/20)	11
第7図	第3次 SP 出土遺物実測図 (S=1/3)	12
第8図	第3次 SX06遺構実測図 (S=1/60)	14
第9図	第3次遺構検出面等出土遺物実測図 (S=1/3、1/2)	15
第10図	第4次 SD01土層実測図 (S=1/40)	17
第11図	第4次調査地調査時周辺測量図 (S=1/500)	18
第12図	第4次調査地遺構配置図 (S=1/200)	19~20
第13図	第4次 SD01上層出土遺物実測図 (S=1/3)	21
第14図	第4次 SD01下層出土遺物実測図① (S=1/3)	23
第15図	第4次 SD01下層出土遺物実測図② (S=1/3)	24
第16図	第4次 SD01下層出土遺物実測図③ (S=1/3、1/4)	25
第17図	第4次 SD01下層出土遺物実測図④ (S=1/3)	27
第18図	第4次 SD01下層出土遺物実測図⑤ (S=1/3)	28
第19図	第4次 SD01下層出土遺物実測図⑥ (S=1/3)	29
第20図	第4次 SD01埋土中トレンチ内一括出土遺物実測図① (S=1/3)	30
第21図	第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図② (S=1/4)	31
第22図	第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図③ (S=1/4)	32
第23図	第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図④ (S=1/4)	33
第24図	第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図⑤ (S=1/4)	34
第25図	第4次 SD01B・C トレンチ内一括、SX01北側小溝、表土剥ぎ時出土遺物実測図 (S=1/3、1/2)	35
第26図	第4次 SX01遺構実測図 (S=1/100)	37
第27図	第4次 SX01出土遺物実測図① (S=1/3)	38
第28図	第4次 SX01出土遺物実測図② (S=1/3、2/3、1/2)	39
第29図	大野城市大利地域の中世集落	50

表 目 次

第1～3表	第3次調査出土遺物観察表①～③	41～43
第4～9表	第4次調査出土遺物観察表①～⑥	43～48

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

上園遺跡は、大野城市上大利4丁目を中心に広がる遺跡である。現在は住宅が建ち並んでいるが、昭和60年にガソリンスタンド建設に伴う発掘調査で、水田下に古墳時代の集落が確認され、遺跡として認識されるようになった。また、『牛頸中通遺跡群Ⅱ』（1982）では上大利日ノ浦遺跡としていたが、調査地周辺の小字が上園であったことから上園遺跡として調査が進められてきた^{註1)}。

今回報告を行うのは、第3・4次調査の成果である。調査期間並びに調査地番・調査原因等については、以下のとおりである^{註2)}。

調査回数	調査地地番	調査面積 (㎡)	調査原因	調査期間
第3次調査	上大利4丁目125-1・10	329	住宅建設	昭和62年4月10日～5月18日
第4次調査	上大利4丁目126-1	380	道路拡幅	昭和62年7～8月

2. 調査体制

各調査についての調査体制について以下に記す。なお、昭和62年度の発掘調査については、教育委員会の体制のみ記した。

[昭和62年度]

教 育 長	久野 英彦
教 育 部 長	池田 嘉門
社 会 教 育 課 長	岡部 弥之助
社会教育課長補佐	青木 克正
技師	舟山 良一、向 直也、徳本 洋一（調査担当）
嘱託	下村 精一、秀嶋 和子

[令和3年度]

教 育 長	伊藤 啓二
教 育 部 長	日野 和弘
ふるさと文化財課長	石木 秀啓（整理担当）
発掘調査担当係長	上田 龍児
技師	齋藤 明日香・山元 瞭平
会計年度任用職員	澤田 康夫
啓発・整備担当係長	林 潤也
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
主事	鮫島 由佳
会計年度任用職員	深町 美佳、山村 智子、三好 りさ

光原 乃里子（令和3年4月～9月）、荒巻 美佐子（～10月）
野上 知則（～令和4年3月）

〔整理作業員〕

小畑 貴子・古賀 栄子・小嶋 のり子・篠田 千恵子・白井 典子・津田 りえ
仲村 美幸・氷室 優・松本 友里江

註1 大野城市教育委員会1986『上園遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第18集

註2 大野城市教育委員会2017『上園遺跡Ⅵ』大野城市文化財調査報告書第160集

Ⅱ. 位置と環境

福岡県大野城市は、福岡県西部にあり、市域は南北に長く、よくヒョウタンの形に例えられる。福岡平野の奥部に位置し、東部は特別史跡大野城跡が所在する四王寺山や乙金山、北部は三郡山からのびる井野山・月隈丘陵、南部は脊振山・牛頸山からのびる丘陵が続く。中央は平野部にあたり、国道3号線や九州自動車道、西鉄天神大牟田線・鹿児島本線など、主要な交通路が通る。

上園遺跡は、市のほぼ中央部にあたり、牛頸山から北に派生する丘陵先端部付近の平地部に位置する。上園遺跡の位置する福岡平野周辺は東アジアとの交流の窓口として、朝鮮半島をはじめ古代より各地域の文化の往来が活発な地域である。上園遺跡の歴史的環境を明らかにするため、市内の遺跡を中心に、周辺遺跡の歴史的環境を述べていくことにしたい。

旧石器時代

大野城市内では、釜蓋原遺跡・雉子ヶ尾遺跡・松葉園遺跡・出口遺跡・横峰遺跡において遺物の出土が確認されており、北部の乙金山・大城山や南部の牛頸山からのびる丘陵地帯を生活の舞台としていたことが知られる。

縄文時代

縄文時代においても、遺跡立地は旧石器時代と同じような様相を示し、南北の丘陵地帯に多くの遺跡が形成される一方、石勺遺跡や原ノ口遺跡でも押型文土器などが出土しており、早期より平野部の微高地上に活動が認められ、活動の範囲が徐々に広がっていく。

弥生時代

福岡平野の弥生時代を代表する遺跡といえば、板付遺跡が挙げられる。板付遺跡は、弥生時代早期には集落の出現が認められ、前期には台地上に環濠集落が営まれるようになり、後期初頭にかけ福岡平野の拠点集落として機能している。墓地としては、三郡山地から西へ下る丘陵上に御陵前ノ椽遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡、金隈遺跡などが営まれており、脊振山地から北へ派生する春日丘陵上には伯玄社遺跡が営まれる。

中期に入ると、春日丘陵上に多数の集落と墳墓が営まれるようになる。特に甕棺墓を中心とする墳墓群は著しい増加を見せるが、中でも特筆されるのは中期後半に位置付けられる須玖岡本遺跡であり、奴国王墓と考えられる。本堂遺跡では、中期後半から末頃の竪穴住居跡などが確認されたが集落の在り方としては小規模・短期的なものであり、墳墓も梅頭遺跡3次調査で甕棺墓が1基確認されたのみで大規模な造墓は認められない。上園遺跡では、9次調査地で中期後半の竪穴住居跡が



大野城市

1. 御供田遺跡
2. 古賀遺跡
3. 御笠の森遺跡
4. 宝松遺跡
5. 村下遺跡
6. 雑餉隈遺跡
7. 中・寺尾遺跡
8. 葉師の森遺跡
9. 原口古墳群
10. 銀山遺跡
11. 雉子ヶ尾遺跡
12. 雉子ヶ尾古墳群
13. 原門遺跡
14. 石勺遺跡
15. 瑞穂遺跡

16. 国分田遺跡
17. 後原遺跡
18. 原ノ畑遺跡
19. 金山遺跡
20. 釜蓋原古墳群
21. 笹原古墳
22. ハザコ遺跡
23. 梅頭遺跡群
24. 本堂遺跡群
25. **上園遺跡**
26. 出口窯跡・遺跡
27. 谷川遺跡
28. 水城跡
29. 野添遺跡群
30. 大浦窯跡群
31. 平田窯跡群

福岡市

32. 華無尾遺跡群
33. 屏風田遺跡
34. 日ノ浦遺跡群
35. 塚原遺跡群
36. 畑ヶ坂遺跡群
37. 上大利小水城跡

春日市

38. 麦野 C 遺跡
39. 南八幡遺跡群
40. 雑餉隈遺跡群
41. 上平田・天田遺跡
42. 駿河 A 遺跡
43. 駿河 B 遺跡

福岡市

44. 駿河 D 遺跡
45. 駿河 E 遺跡
46. 原ノ口遺跡
47. 立石遺跡
48. 先ノ原 B 遺跡
49. 先ノ原・春日公園内遺跡
50. 伯支社遺跡
51. 大南遺跡
52. 大谷遺跡
53. 九州大学筑紫地区遺跡群
54. 向谷遺跡
55. 向谷北遺跡
56. 向谷西遺跡
57. 向谷南遺跡

春日市

58. 向谷古墳群
59. 春日平田北遺跡
60. 春日平田遺跡
61. 大牟田窯跡
62. 惣利窯跡群
63. 惣利遺跡
64. 惣利北遺跡
65. 惣利西遺跡
66. 惣利東遺跡
67. 大土居水城跡
68. 門入遺跡
69. 春日平田遺跡群
70. 春日平田西遺跡
71. 塚原古墳群
72. 浦ノ原窯跡群

太宰府市

73. 島本遺跡
74. 神ノ前窯跡群
75. 原口遺跡
76. 久郎利遺跡
77. 日焼遺跡群・窯跡群
78. 宮ノ本遺跡群・窯跡群
79. 成屋形遺跡群
80. 成屋形古墳群
81. 前田遺跡

第 1 図 上園遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

確認され、本堂遺跡を中心とする集落が広がっていたことが分かる。

後期に入っても須玖岡本遺跡群ではなお盛んに青銅器生産がおこなわれており、比恵・那珂遺跡群では首長居館に類する環溝の存在から、規模が拡大する様子が明らかである。駿河遺跡では竪穴住居跡が確認され、鉄器や青銅製鋤先などが出土しており、拠点的な集落と考えられるが、牛頸川の南側から大宰府にかけての地域は集落が存在するが小規模なものである。

古墳時代

古墳時代に入ると、福岡平野周辺にはたくさんの古墳が造られるようになる。那珂八幡古墳・原口古墳といった大型前方後円墳のほか、福岡平野の南北の丘陵上には小規模な円墳・方墳などがまるとまって営まれる。御陵古墳群・宮ノ本古墳群・炭焼古墳群では前期からの墳墓群が認められ、該期の古墳群が拠点的に分布していることが分かる。

集落では、比恵・那珂遺跡群では外来系土器の搬入が多く認められ、一大交易センターであったとの位置付けがされている。一方、やや内陸に入った瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡、本堂遺跡、殿城戸遺跡でも集落遺跡が確認されるが、大規模なものではない。

5世紀代になると、老司古墳で初めて横穴式石室が築かれる。野藤1号墳・貝徳寺古墳などの那珂川中流域における前方後円墳の築造が活発なのに対し、御笠川流域では笹原古墳・成屋形古墳・古野古墳群が築かれるが、帆立貝式前方後円墳・円墳を中心としており、明らかな格差が見られる。塚原古墳群は牛頸川流域に位置し、5世紀後半から造墓を開始しており、新たな群集墳が営まれる。集落は比恵・那珂遺跡群が停滞する様相を見せており、立花寺B遺跡では5世紀後半にはじまる大規模な集落が確認される。また、上園遺跡や中・寺尾遺跡、金山遺跡などでは小規模な集落が営まれる。

6世紀代になると、継体天皇21年（527年）北部九州を舞台とする磐井の乱という大事件が起こり、北部九州の支配体制に大きな変化が認められる。こうした変化は遺跡の推移にも現れており、先述した牛頸塚原古墳群やカクチガ浦古墳群など5世紀代に造墓を開始した群のうち、6世紀前半から中頃を境にして造墓を停止する群がある。後半になると、福岡平野南北の丘陵上には小古墳が爆発的に築造されるようになる。群の中には、観音山古墳群中原I-1号墳のように全長30m以下の前方後円墳を含むものもある。また、善一田古墳群では直径26mの円墳を群内に含み、新たな地域首長の発生を認めることができる。牛頸窯跡群周辺では、牛頸中通古墳群・後田古墳群・小田浦古墳群は須恵器工人の古墳群とされる一方、梅頭遺跡群では窯を墳墓に転用した事例が知られており、須恵器工人の多様な墓制の在り方が認められる。また、6世紀中頃に操業を開始する牛頸窯跡群は次第に規模を拡大し、その製品は福岡平野周辺一帯に供給されている。集落では、比恵・那珂遺跡群は6世紀後半以降規模を拡大し、那津官家があった可能性が指摘されている。薬師の森遺跡や牛頸塚原遺跡においても集落の拡大が見られ、鉄器生産や須恵器生産の拡大と関わりがある。上園遺跡では6世紀中頃に集落が拡大する様相が認められるが、7世紀になると衰退しており、牛頸窯跡群操業を契機に始まった集落の不安定さが指摘できる。

飛鳥時代～奈良時代

7世紀前半代は、前代に築造された古墳への追葬や新規の古墳築造が認められるが、この様相が

一変したのは664年から665年におこなわれた水城・大野城の築造を契機とする。この時期に比恵・那珂遺跡群にあった那津官家は現在の太宰府市に機能が移り、大宰府政庁が成立すると考えられる。上大利・春日・大土居・天神山には小谷を塞ぐように小水城が築かれ、大野城・水城とともに大宰府を囲む羅城として機能している。

大宰府は西海道を統括する地方最大の役所である。7世紀後半は政庁Ⅰ期段階にあたり、大宝律令施行以後の政庁Ⅱ期（8世紀前半以降）段階には条坊の整備も進み「天下之一都会」と謳われる。大宰府政庁・条坊の整備とともに官道の整備も進められ、谷川遺跡や春日公園内遺跡では水城西門ルート、板付遺跡や高畑遺跡などでは東門ルートが確認されている。官道沿いには新たな集落や官衙遺構の展開が認められ、高畑遺跡では木簡・「寺」銘墨書土器・瓦などの出土遺物や伝承から高畑廃寺あるいは那珂郡衙の可能性が指摘されている。また、井尻B遺跡では井尻廃寺の想定がなされ、麦野遺跡群・南八幡遺跡群・雑餉隈遺跡群では8世紀の大規模な集落が認められ、水城からのびる東西ルートの官道間の狭い地域に広がる集落遺跡の性格について解明が望まれる。牛頸窯跡群は8世紀前半には和銅六年銘ヘラ書き須恵器より、調納物としての貢納があったことが判明した。その製品は肥前・豊前・肥後国など北部九州各国にもたらされることが胎土分析の結果より判明し、西海道下随一の窯業地帯として盛んに煙を上げている。

平安時代～戦国時代

前代に隆盛を極めた大宰府も、9世紀に入ると遺構・遺物量が激減しており、停滞する様相を見せている。こうした状況は周辺集落にも表れており、麦野遺跡群等に見られた大規模な集落は姿を消す。また、西海道最大の須恵器生産地であった牛頸窯跡群も、9世紀に入ると生産量が減少し、9世紀中頃には操業に肥後地域の工人の参画が想定できるなど、生産が衰退・終了へむかっている。薬師の森遺跡や天神田遺跡、谷川遺跡や上大利小水城周辺遺跡では、瓦器焼成遺構や棒状土製品が多量に見つかっており、瓦器生産が盛んに行われたことが窺える。平安時代も後半になると律令体制は崩壊し、武士が活躍する時代を迎える。大宰府政庁・鴻臚館の機能は中世都市「博多」に移る。

本堂遺跡では、谷部から10・11世紀代の遺物が大量に出土しており、上園遺跡やその周辺の遺跡からも同時期の集落が増加し、このあたりが大和村であったと考えられる。後原遺跡・御供田遺跡でもこの時期に集落が出現しており、白木原村の萌芽と考えられる。御笠の森遺跡は御笠川西岸に広がる遺跡であり、区画溝を有する屋敷跡が確認される大規模な集落である。隣接する宝松遺跡も区画溝を巡らす集落が確認されており、両遺跡は江戸時代前期日田街道沿いに移転する前の山田村の跡と考えられる。出土遺物としては茶臼や羽子板などが出土しており富裕層が居住していたことがうかがえ、『筑前国続風土記拾遺』からも周辺の筒井村・中村を含む大きな村であったことが分かる。

江戸時代以降

江戸時代になると、明治22年に成立する大野村につながる村々が成立する。後原遺跡は御供田遺跡に隣接しており、主に江戸時代後期の集落・墳墓が確認されている。近世の白木原村本村と考えられる。また、日田街道沿いには雑餉隈遺跡がありNVOC銘の入った肥前産磁器が出土することから、雑餉隈町にあたり、街道を行き交う人や物の動きを示している。



第2図 上園遺跡調査地位置図 (S=1/3,000)

Ⅲ. 調査の結果

1. 第3次調査

(1) 調査概要

上園遺跡第3次調査地は、大野城市上大利4丁目125-1・10に所在する。住宅2棟の建設が計画され、事業地のうち、ほぼ全面にあたる329㎡について発掘調査を実施した。

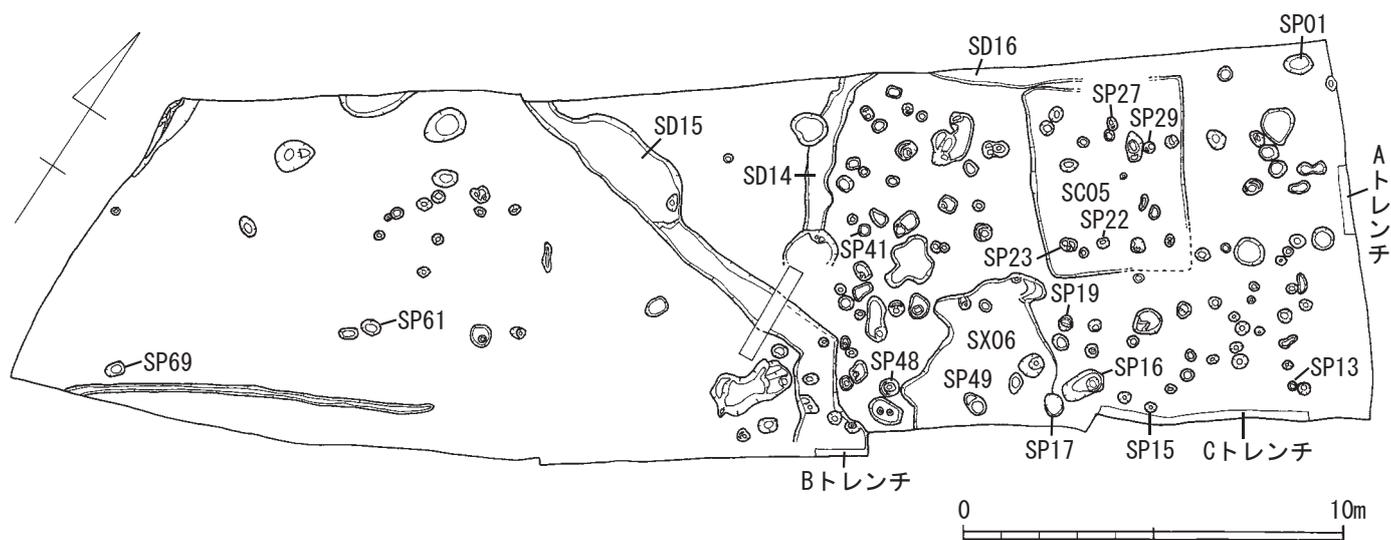
調査地は、脊振山系から北に続く丘陵先端から下った平地部にあたり、平田川が開析する河岸段丘上に位置する。調査前は畑として利用されていた。調査は、昭和62年4月10日～5月18日の間に実施した。調査の結果、地表下およそ30cm程度で遺構面が検出され、竪穴住居跡1棟・溝・土坑・ピットが確認された。竪穴住居跡は調査区の東側に位置している。溝は、竪穴住居跡を囲むように巡るものと、調査区の中央付近を東西方向にのびるものがある。これら竪穴住居跡や溝の東側は土坑・ピットが多く検出されたが、西側は散在する。なお、遺構番号については、昭和60・61年度に南側隣接地で行われた上園遺跡第1・2次調査からの連番として調査をおこなっている。

(2) 遺構と遺物

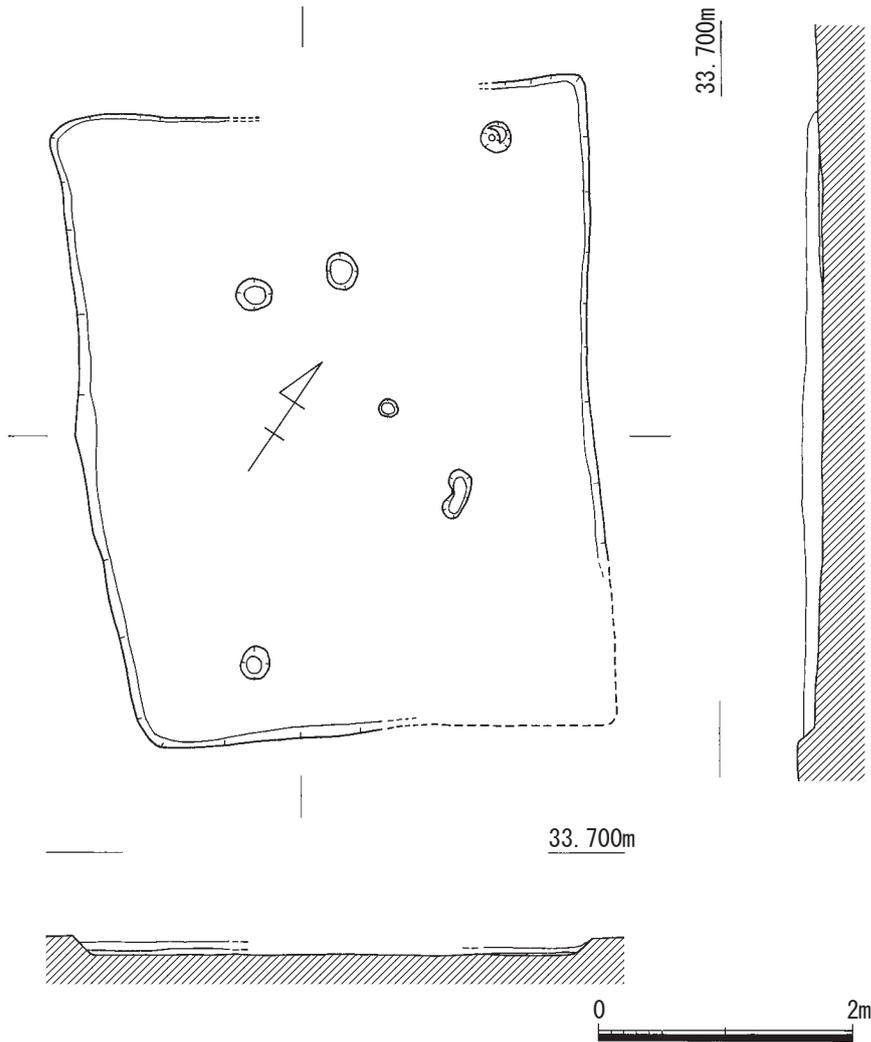
1) 竪穴住居跡

SC05 (第4図、図版2)

調査区の東側に位置する。長辺4.92m、短辺4.02mのやや長方形ぎみの平面プランをとる竪穴住居跡であり、検出面から8～11cmで床面に達する。東側コーナー部分は検出できなかった。また、北西側側壁中央部でカマドの袖部と考えられる土の広がりを確認し4分割して確認をおこなったが、カマドではないことが明らかになった。床面からは直径15～28cm程度のピットが確認されたが、主柱穴はなく壁溝も確認できなかった。遺物取り上げは5住としていたが、SC05として報告する。



第3図 第3次調査地遺構配置図 (S=1/200)



第4図 第3次 SC05遺構実測図 (S=1/60)

出土遺物は、土師器・瓦器がある。

出土遺物(第5図)

土師器

椀(1) 高台部のみの破片。高台部は高い。

瓦器

椀(2) 口縁部のみの小片。内外面のミガキは密である。

2) 溝

SD14 (第3図、図版2)

SC05の西側約5mの所に位置する。調査区外より南へ約4.5mのび、ゆるく東側にまがる。ピットに切られており、ここから南側は確認でき

ない。幅は0.40~0.75m、検出面からの深さは4~10cmと浅く幅の広い溝で、北側へ向かって緩く下る。平面形態と深さから見て、北側へ流水するものと考えられるが、性格についてはよく分からない。遺物取り上げは一部溝2としているがSD14として報告する。出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器がある。

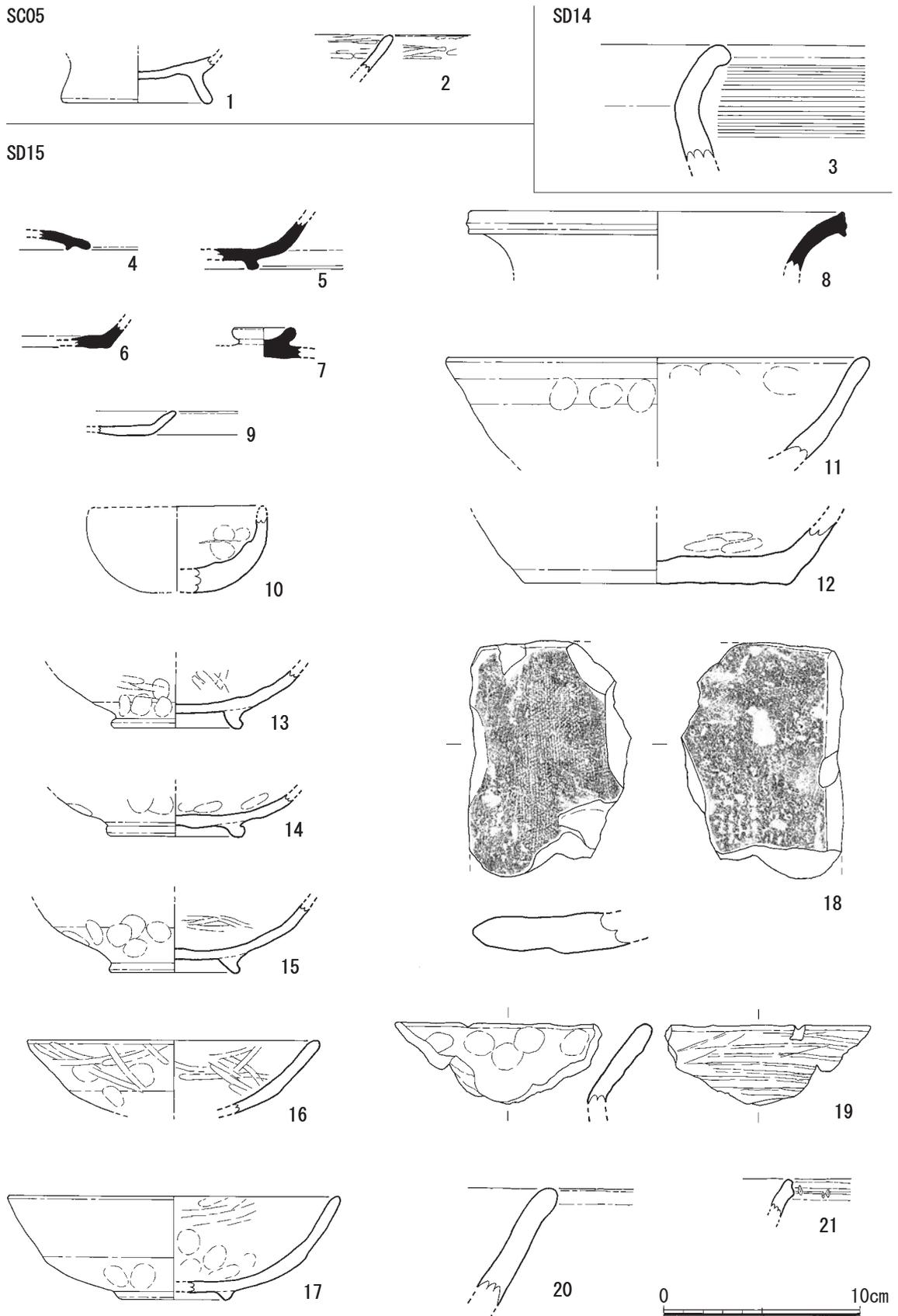
出土遺物(第5図)

土師器

甕(3) 口縁部のみの破片である。口縁端部は丸くおさめ、外面にはカキメ?が施される。

SD15 (第3図、図版2)

調査区南側から北西方向にのびた後、西側に向きを変え、ほぼ直線的に西側にのびて調査区外にいたる。中央部では幅が広がり約1.50mになるが、その前後では幅0.52~0.63mと幅を減じている。検出面からの深さは16~20cmと浅く、西側から東側に向かって緩く下る。平面形態と深さから見て、東側へ流水するものと考えられる。隣接する第1・2次調査地ではSD05が近接するが、幅や形状が異なるため、連続するかどうか分からない。遺物取り上げは一部溝1としているが、SD15



第5図 第3次 SC05、SD14・15出土遺物実測図 (S=1/3)

として報告する。出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器・瓦がある。

出土遺物（第5図、図版8）

須恵器

杯蓋（4） 口縁部のみ的小片。かえりは短くつまみだされる。

杯身（5） 高台部のみ的小片。高台は短く、低くふんばる。

杯（6） 底部のみ的小片。底部外面は平らで、ヘラ切り後ナデる。

高杯（7） 蓋の小片である。つまみのみ残存する。中央は大きくくぼめられる。

甕（8） 口縁部のみ破片。端部下端は短く垂下する。

土師器

小皿（9） 口縁部から底部の小片である。器高1.2cm。底部は磨滅しているが、ヘラ切りか？

手づくね土器（10） 口径9cmほどに復元できる。内面は指頭痕が残る。

鉢（11・12） 11は口縁部から体部の破片である。破片数としては一個体分程度あるが、全周しないため、最も残存状態の良い所で作図した。復元口径21.6cm、残存高5.2cm。口縁部にむかって大きくひろく。12は11と一連のものと考えられる底部片であるが、接合しない。底部は平底で、外面は凹凸がある。内面はクレーター状にはじけたようであり、被熱を受けているのであろうか。

瓦器

椀（13～17） 13～15は高台はひらき、体部は丸い。17は断面三角形状のつぶれたような高台を有する。体部は丸く、口縁部にむかって厚くなり、内面は口縁部付近に重ね焼きの痕跡が残る。

瓦

平瓦（18） 狭端部の破片。全体に磨滅が著しいが、凸面は縄目タタキ、内面に布目が残る。

縄文土器

鉢（19・20） 19は外面に条痕がみられる。20は外面は剥離しているが、条痕は認められない。

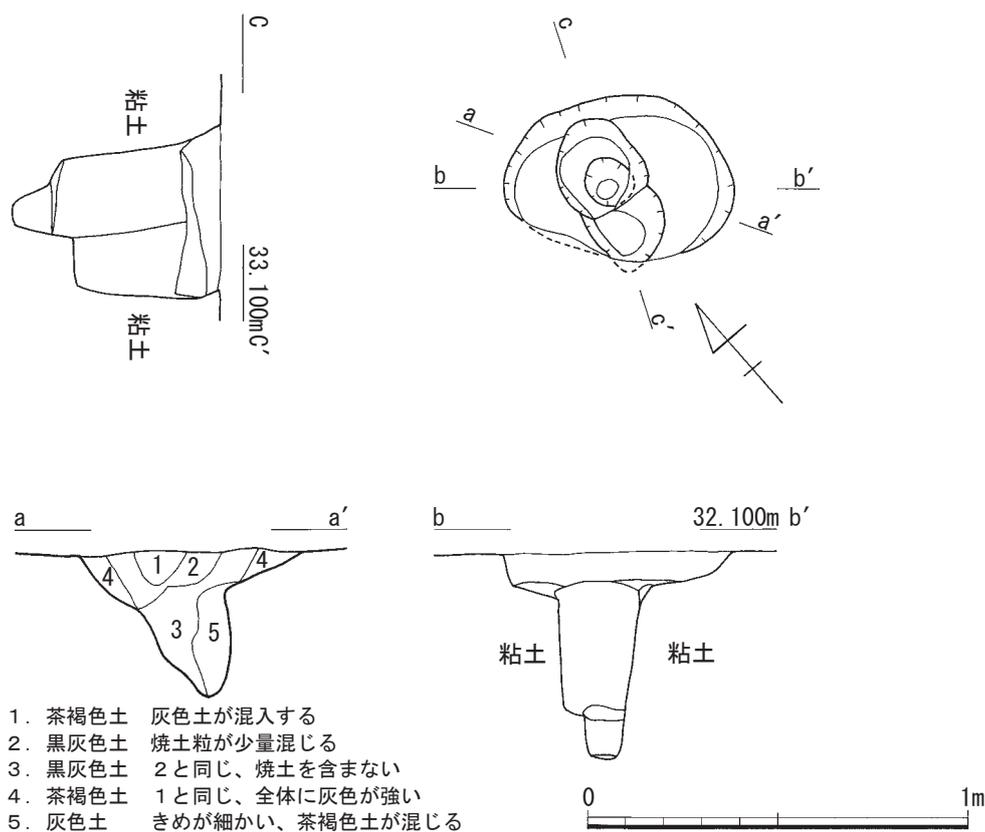
弥生土器

甕（21） 口縁部のみ破片である。端部には刻み目が施される。

3) ピット

SP17（第6図、図版3）

調査区東側に位置し、SX06に近接する。長辺0.58m、短辺0.44mの楕円形を呈するピットである。掘り下げの結果、ピット内に径23～25cmの小ピットを確認した。小ピットの検出面から底面までの深さは54cmである。埋土は茶褐色土や黒灰色土・灰色土であり、埋土を除くとSP17内の壁面はすべて粘土が貼り付けられていた。この粘土について、調査当時の所見では「SP17は、地山掘方上に粘土を貼り付けたものではなく、粘土層そのものに掘り込まれた遺構である。深さ162.5cm（レベル読み値 LH=34m）の部分で底面は一面砂になる。尚、粘土層の中から流れ込みと見られる須恵器片・木炭が出土した。」とされている。こうした状況から、SP17は、柱の周りを粘土で固めていたと考えてよい。小ピットを含めた断面形を見ると、ロクロピットのように見えるが、確言できない。埋土からは、須恵器・土師器・瓦器が出土した。



第6図 第3次 SP17遺構実測図 (S=1/20)

出土遺物 (第7図)

瓦器

椀 (27) 口縁部から体部の小片。体部は丸く、瓦質に焼成される。

その他のピット (第3・7図、図版1・8)

調査時の所見として、「SP41・48・49などの埋土がSP17と同様の状況を呈する。粘土は淡灰緑色できわめて粒子が細かいごく小さな雲母（であろう）の粒を含む。あるいは土器の材料か。」とされている。堆積状況は明らかでないが、ピット内に粘土が堆積していたことが分かる。また、SP69からは完形に近い須恵器杯身がピット埋土上面に正置された状態で出土している。また、それぞれのピットから須恵器・土師器・瓦器等が出土している。以下に、ピット出土の遺物について記す。なお、ピットはP-として調査時につけられているが、全てSPとして報告する。

SP01

須恵器

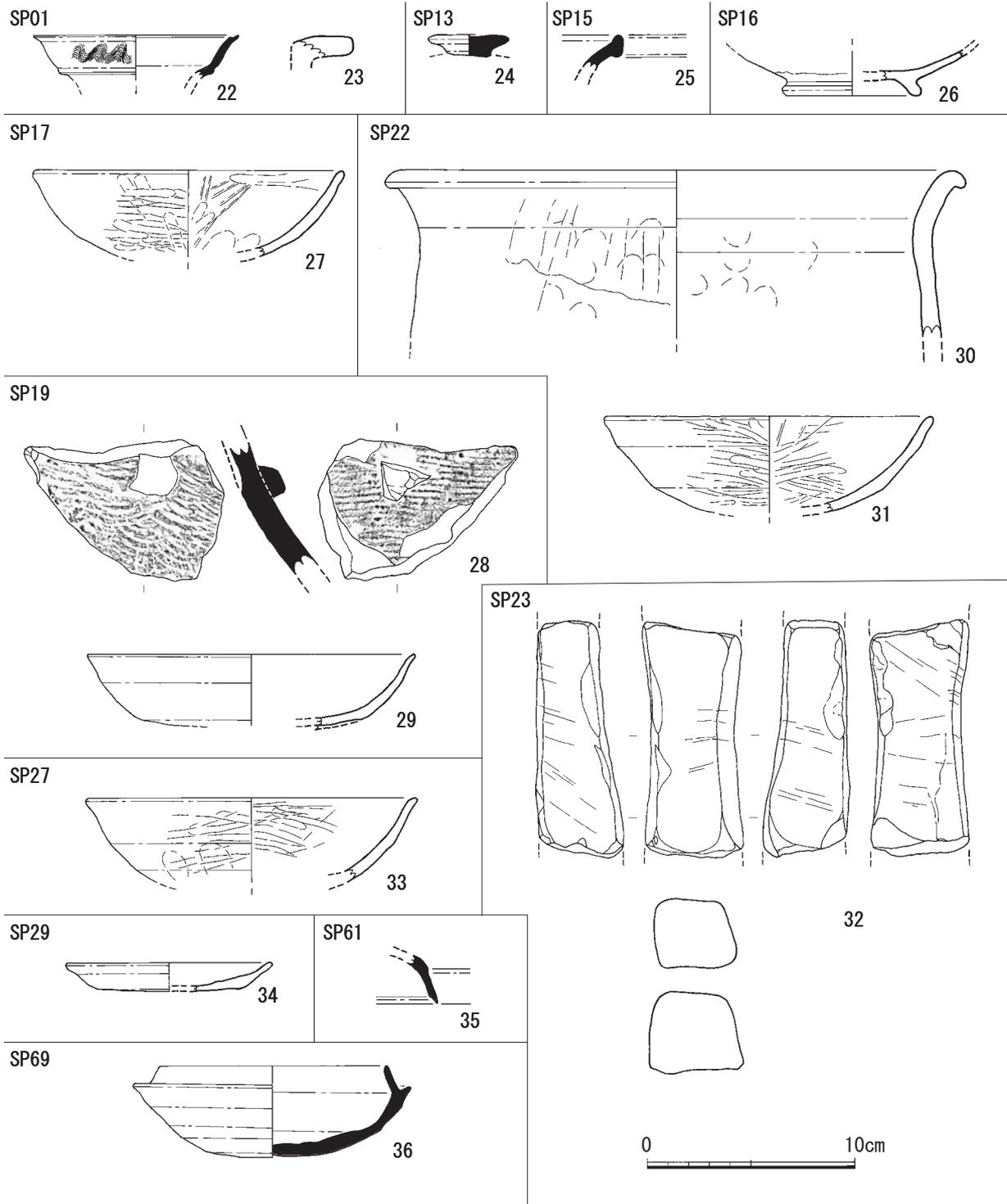
甗 (22) 口縁部の小片である。口縁端部は段をもち、外面には波状文が一条施される。

土師器

鍋 (23) 口縁部のみの小片である。内外面ともナデて仕上げる。

SP13

須恵器



第7図 第3次 SP 出土遺物実測図 (S=1/3)

高杯 (24) つまみのみの小片である。還元不良で橙色を呈する。

SP15

須恵器

甕 (25) 端部だけの小片である。端部は丸く仕上げられる。

SP16

土師器

椀 (26) 高台は短く丸く、外方に広がる。

SP19 (第7図)

須恵器

甕 (28) 外面に甕片が粘着する。破断面の一部に降灰が認められ、焼台ではないかと考える。

土師器

椀 (29) 口縁部から体部の破片である。外面ははじけたように剥離しており、焼成時にともなうものであるか。

SP22

土師器

甕 (30) 口縁部から体部上半の小片である。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。

瓦器

椀 (31) 体部の破片である。内外面ともミガキの痕跡がよく残る。

SP23

石器

砥石 (32) 両端面を失うが、残存長11.55cmを測る。四面とも砥石として使用される。砂岩か？

SP27

瓦器

椀 (33) 体部の破片である。内外面ともミガキの痕跡がよく残る。

SP29

土師器

杯 (34) 復元口径10.0cm、器高1.4cm。底部外面はヘラ切り。

SP61

須恵器

杯蓋 (35) 口縁部のみの小片である。口縁端部は段を有する。

SP69

須恵器

杯身 (36) 完形に近い杯身である。口縁部は高く立ち上がり、底部は深く丸い。底部外面ヘラ削り。

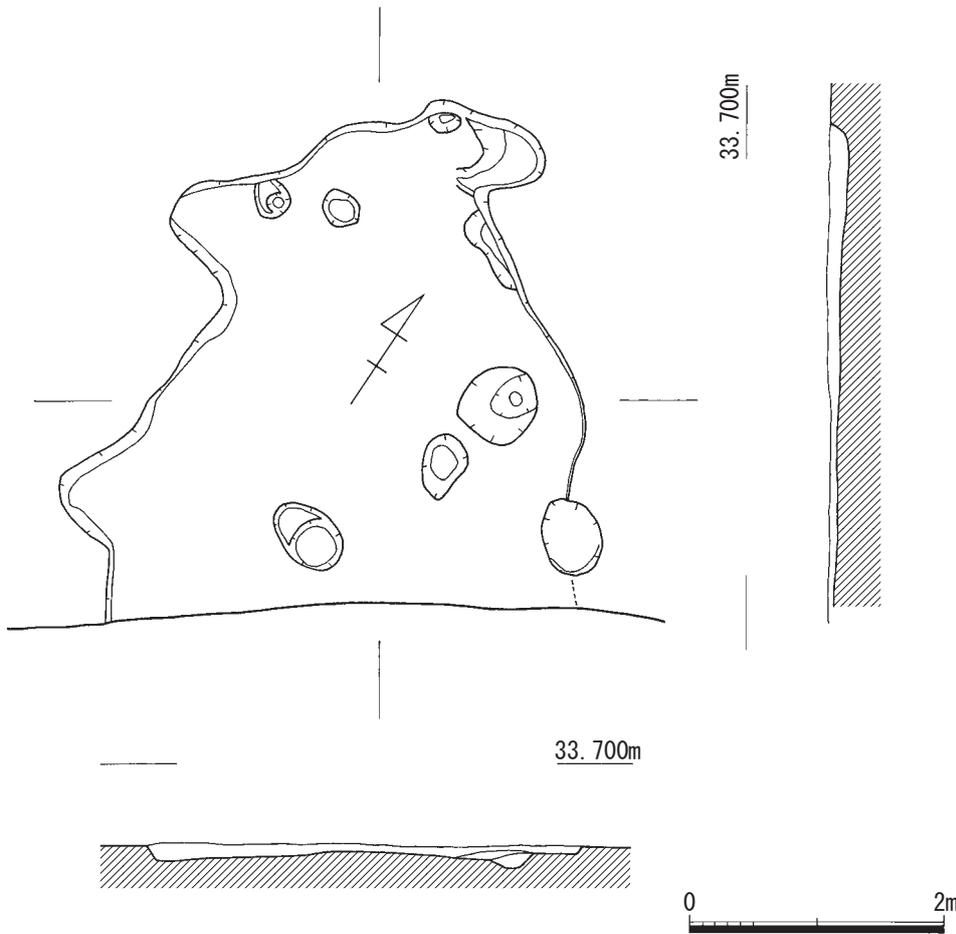
4) 土坑

SX06 (第8図、図版4)

調査区東側に位置し、調査区外に広がる。長辺3.72mで調査区外にいたり、短辺3.42mを測る不整形プランを呈する。検出面からの深さは最大14cm。床面からはピットが確認されたが、柱穴となるようなものではない。出土遺物には土師器があるが、小片のため図化できなかった。

5) 遺構検出面

第3次調査では、表土剥ぎ時や遺構検出面から多くの出土遺物があった。まとまった量があり、



第8図 第3次 SX06遺構実測図 (S=1/60)

第3次調査地内では確認できていない時期の遺物も含まれていた。また、調査地内の遺構残存状況は悪く、相当の削平を受けている。このことから、遺構検出面等から出土した遺物について、以下の通り報告する。

出土遺物(第9図、図版8)

須恵器

杯蓋 (37~39)

37は口縁部から体部にかけての小片。口縁端部は丸い。還元不良。橙色を呈する。38は

かえりを有する。磨滅が著しく調整は不明である。39は天井部の破片。外面に円弧状のヘラ記号を有する。

杯身 (40・41) 40は立ち上がりが高く、端部に段を有する。また口縁部は細かく剥離している。41は高台を有する。底部と体部境に高台が巡り、内端面で接地する。

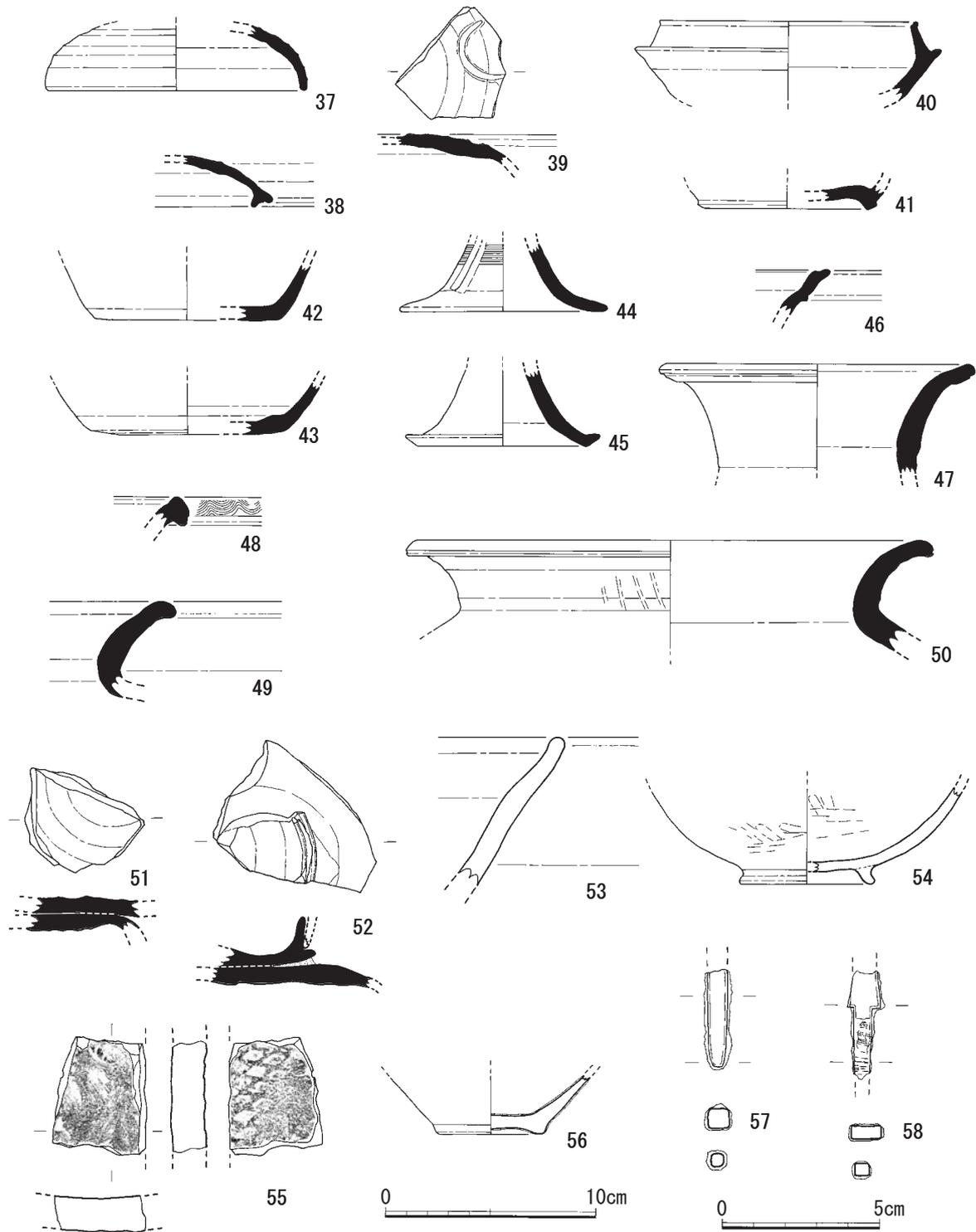
杯 (42・43) 42は外面が還元するが、内面は橙色を呈し、還元不良である。43は底部と体部の境は丸く仕上げられる。いずれも底部外面はヘラ切り後ナデ。

高杯 (44・45) 44はスカシを有し、脚柱部にカキメを有する。裾部はハの字に開き、脚端部は丸く仕上げられる。45は短脚で、還元不良である。脚端部は断面三角形状になる。

甕 (46) 口縁部の小片である。口縁端部は段をもち、内面は降灰が認められる。

横瓶? (47) 復元口径15cm。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。壺類とも考えられるが、ここでは瓶類の中で、横瓶の可能性を指摘しておきたい。

甕 (48~50) 48は口縁端部のみの破片。端部外面に波状文を施文後、上端部と下端部をナデて仕上げる。49は頸部が短く、口縁部は大きく外反し、端部は丸く仕上げる。口縁部外面に降灰が認められる。50も頸部が短く、口縁部は大きく外反し、端部は丸く仕上げる。復元口径25.2cm。口縁部内面に降灰が認められる。



第9図 第3次遺構検出面等出土遺物実測図 (S=1/3、1/2)

釉着資料 (51・52) いずれも須恵器であり、別の個体が釉着したものである。51は杯類と考えられる破片の外面向士が釉着する。52も杯身と杯類の外面向士が釉着する。杯身の立ち上がりには杯蓋の口縁端部が釉着している。

土師質土器

鉢 (53) 口縁部にむかって、大きくひらく。端部は丸くおさめる。拵目は確認できない。

瓦器

椀 (54) 底部から体部にいたる小片である。高台は細く、ハの字にひらく。

瓦

平瓦 (55) 側縁部の小片である。凸面は細かい斜格子目タタキ、凹面はナデが確認できる。

青磁

椀 (56) 高台部のみの残存であり、全形が分からないが、初期高麗青磁椀 I - 2Bb 類^{註1)} である。胎土は灰色を呈し、釉薬は黄緑色を呈する。底部内面には窯砂が落ちる。底部外面は蛇の目高台で、高台畳付まで施釉され、目跡が残る。

鉄器

鉄鏃 (57・58) 57は茎部の破片。断面は方形を呈する。58は茎部に樹皮状の痕跡が残る。

(3) 小結

ここで第3次調査の遺構と遺物についてまとめておく。出土遺物としては、縄文時代のものから平安時代のものまで認められる。遺構としては、SC05としたものは、土師器・瓦器を含んでおり、カマドや住居にともなう支柱穴・壁溝も確認できていないことから、土坑としておいたほうがよさそうである。また、SD15は中島編年瓦器椀 II 1～2類^{註2)} を含むことから、11世紀後半～12世紀後半に埋没するものと考えられる。SD14は、図化できた遺物が少ないが、SP22より同形態の甕が瓦器と共伴することから、同じ時期のものとしてとらえておきたい。

また SP17はロクロピットのようにも考えられる。粘土がピット内に充填された状態で確認されており、埋土中から瓦器が出土していることからすると、11世紀後半～12世紀後半にあたりと考えることができる。そうするならば、ピット内に粘土が充填されるのは51・52の釉着資料が示すような古墳時代の須恵器生産に係るものではなく、瓦器焼成に係るものである可能性が高いと考えられる。古代における土器製作には回転台の使用が考えられているが、遺構については事例を知らない。今後、検討が必要である。さらに、56は高麗青磁であり、これまで本市では確認されていない^{註3)}。その位置づけについても、今後検討していく必要がある。

註1 太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集

註2 中島恒次郎1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会

註3 なお、高麗青磁についての所見は、韓盛旭氏(民族文化遺産研究院)・主税英徳氏(琉球大学)からご教示を頂いた。

2. 第4次調査

(1) 調査概要

上園遺跡第4次調査地は、大野城市上大利4丁目126-1に所在する。道路拡幅に伴い発掘調査を実施し、市道沿いの380㎡について発掘調査を実施した。

調査地は、第3次調査地と同様に脊振山系から北に続く丘陵先端から下った平地部にあたり、平田川が開析する河岸段丘上に位置する。調査前は水田として利用されていた。調査は、昭和62年7月～8月の間に実施した。調査の結果、当時の道路面とほぼ同じ高さで遺構面が検出され、溝・土坑・ピットが確認された。溝は幅が広く北東方向にのびるものと、幅が狭く方形に巡るものがある。

(2) 遺構と遺物

1) 溝

SD01 (第10・12図、図版6・7)

調査区の南側で検出され、南端から北東方向にやや蛇行しながらのびる溝である。調査時には遺構名称を大溝とされていたが、ここではSD01として報告を行う。SD01は南北とも調査区外にのびるため、全形は不明である。幅3.8～4.8m、検出面からの深さは最も深いところで80cmほどある。底面の標高は溝底の幅が最も狭まる所で深くなるが、ここより南北の溝底の深さはほぼ変わらない。埋土は褐灰色～青灰色土を中心とする上層と黒色～灰黒色土の下層に分けることができ、これを基に遺物取り上げを行っており、これに基づいて報告する。また、遺物取り上げの際に、一括して取り上げられているものもあり、それぞれの取り上げ状況に基づいて報告を行う。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦器・棒状土製品・石鍋・桃の種・馬歯など多量の遺物がある。

上層出土遺物 (第13図、図版8)

土師器

小皿 (59) 胎土は灰白色を呈する。底部外面はヘラ切り、板状圧痕が残る。

椀 (60) 高台は丸く貼り付けられる。体部内面には、コテ当て痕が残る。

皿 (61) 杯底部がほぼ水平となることから、高台を持つ皿と考えた。胎土は精選されている。

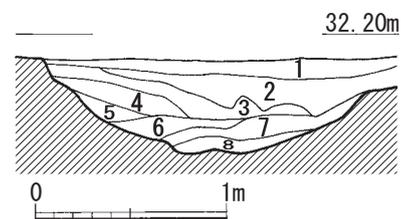
丸底杯 (62) 杯部は深く、底部は丸く仕上げられる。内外面とも、磨滅により調整不明。

瓦器

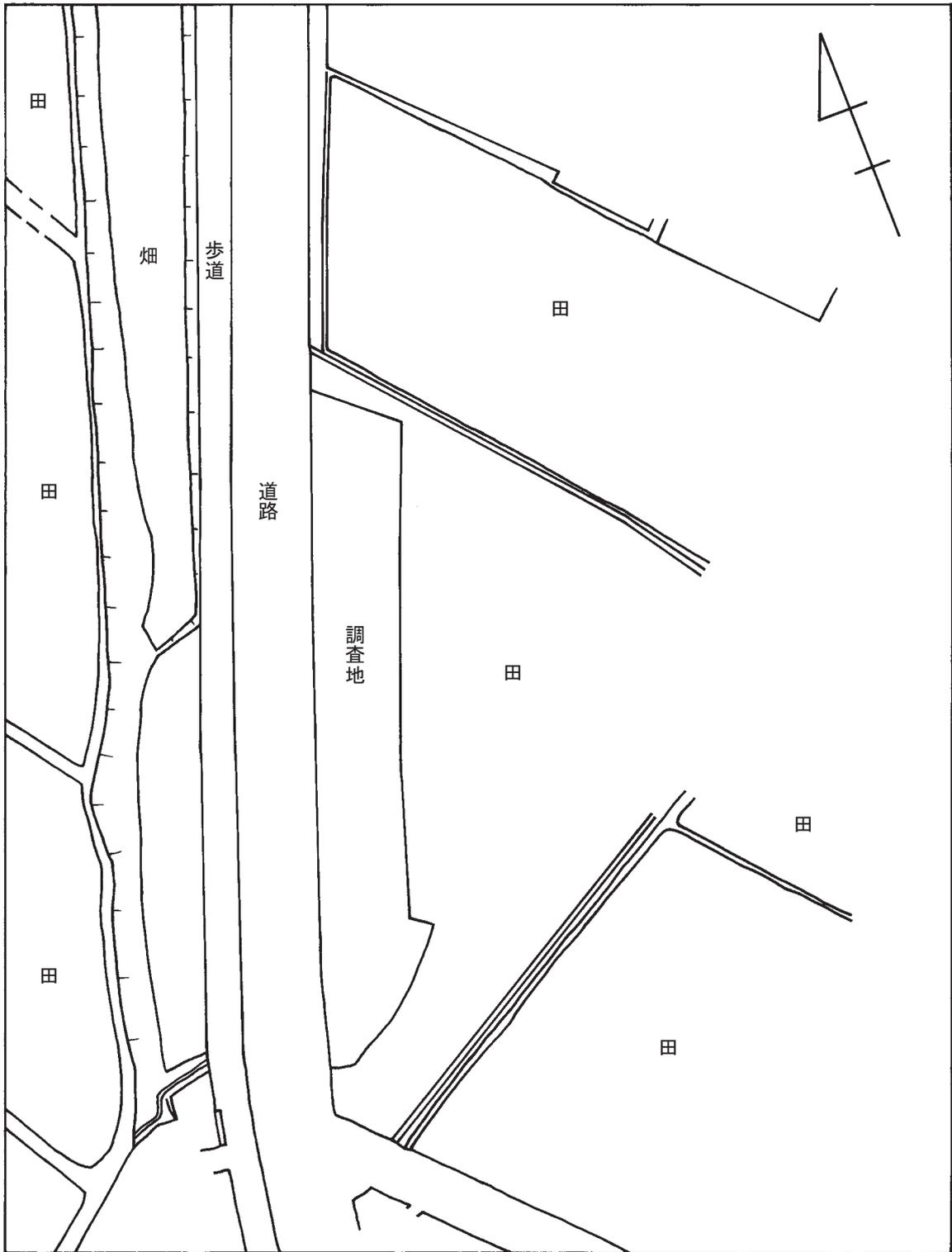
椀 (63～65) 63はやや焼き歪む。焼成不良。体部外面から口縁部内面付近がいぶされる。64は硬く焼き締まる。内外面とも密なミガキが施される。65は大きく焼き歪む。内外面のミガキは密である。

白磁

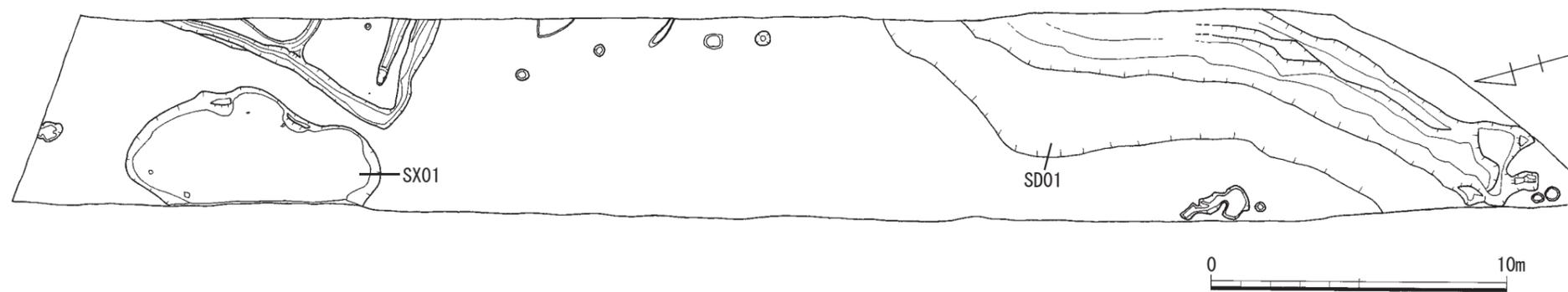
椀 (66～68) いずれも太宰府陶磁器分類白磁 第10図 第4次 SD01土層実測図 (S=1/40)



1. 褐灰色粘質土 (上層)
2. 褐灰～灰青色粘土 (上層)
3. 青灰色砂質土 (上層)
4. 黒灰色砂質土 (上層)
5. 黒灰色砂質土 (上層)
6. 黒色粘質土 (下層)
7. 黒色砂質土 (下層)
8. 灰黒色砂質土 (下層)



第11図 第4次調査地調査時周辺測量図 (S=1/500)



第12図 第4次調査地遺構配置図 (S=1/200)

V類^{註1)}。釉調が異なっており、別個体と考えられる。

弥生土器

壺 (69) 広口壺の一部である。器壁は厚く、白色石粒を多く含む。

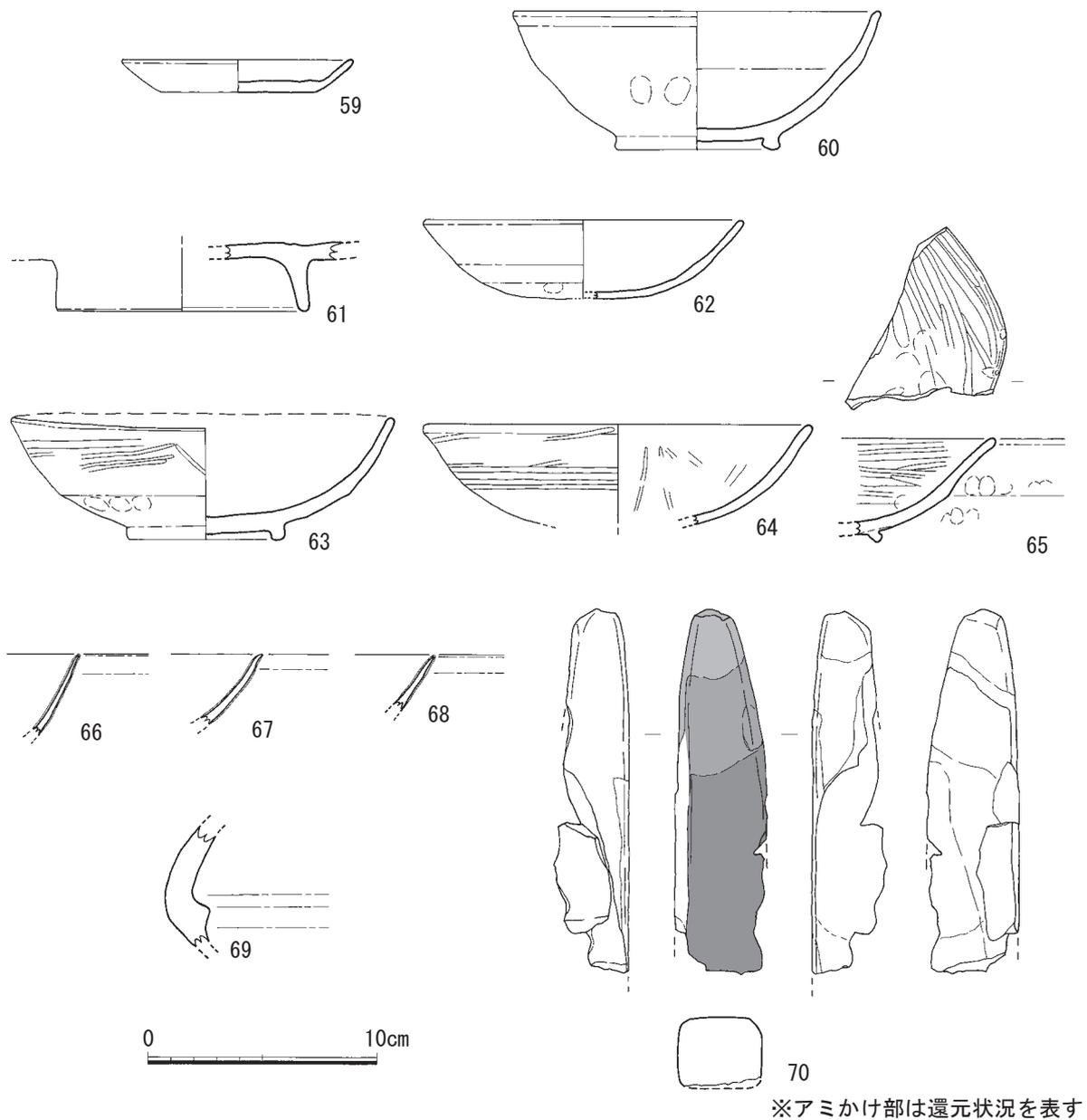
土製品

棒状土製品 (70) 片面は弾けたように剥離する。先端部は還元し、中央部は黒くいぶされる。

下層出土遺物 (第14~19図、図版8)

須恵器

杯身 (71) 高台径12.2cmの大型の杯身。底部外面に粘土紐巻上げ痕が残る。



第13図 第4次 SD01上層出土遺物実測図 (S=1/3)

高杯 (72) 基部は太く、三方にスカシを有する。脚部は大きく広がり、脚付壺の可能性もある。

短頸壺 (73) 頸部は短く、端部は外方に開く。

盤 (74・75) いずれも口縁端部を平らに近く仕上げる。75は74に比べて器壁が厚い。

甕 (76・77) 76は中小型の甕。口縁部内面に自然釉がかかる。77は大甕。口縁部は肥厚する。

把手付甕 (78) 小片のために傾きに難がある。内面は指で成形された後、ナデて仕上げられる。

釉着資料 (79) 奈良時代の杯の重ね焼き資料である。口縁部外面は重ね焼きの痕跡が残る。

土師器

小皿 (80・81) 80は内外面とも磨滅により調整不明。81は底部ヘラ切り。板状圧痕が残る。

杯 (82~87) 82は大きく焼け歪む。底部は丸くなり、体部中位に屈曲を持つ。丸底杯に近い。

83は底部は平らに近い。淡橙色を呈し、丁寧に仕上げられる。84は底部は平らに仕上げられる。橙色を呈し、精緻に仕上げられる。85は底部は平らで、底部外面は、板状圧痕が残る。86は体部のみの小片。底部外面ヘラ切り。87は体部のみの小片であるが、丸底杯になる可能性もある。

丸底杯 (88) 浅い杯部を有し、焼成はやや不良。内外面ともに磨滅により調整は不明である。

椀 (89) 高い高台を持ち、椀部は丸くなるようである。内外面とも磨滅により調整不明。

鉢 (90~94・98) いずれも灰白色を呈する。ただし、灰白色を呈するのは器表面のみで、器壁の内側は灰色から黒色を呈し、最終段階で酸化雰囲気焼成されたと考えられる。いずれも小片であり、全形が分かる資料はなかったが、口径や器高、口縁部形態の違いに基づいて図化を行った。

90はやや浅めのものである。底部はやや丸みをもつようであり、口縁端部は丸くおさめる。91は口縁部外面を強くナデて玉縁状となることから別個体とした。92は口縁部から底部の一部まで接合してきた。底部は平底で、体部との境は明瞭である。93は体部は大きく開き、内外面ともヨコナデで仕上げられる。94は底部片。外面は平らであるが、磨滅のため調整不明。内面は凹凸が著しく、焼成時にはじけたような雰囲気である。98は体部から底部の小片。平底になる。

高台付鉢 (95) 底部を欠く。高台は被熱して煤がついており、体部下半にまで及んでいる。

甕 (96・97・99・100) 96は口縁部を短く外反させる。97は端部を玉縁状に仕上げる。外面は煤が著しくついており、内面もおこげが残る。99は平底となる。鉢の可能性もある。内面は煤が著しく、残存部の上端破断面から外面の一部まで及んでいる。100も平底。内面に煤がつく。

把手 (101) 把手のみの残存。内外面とも磨滅により調整不明。甌か？

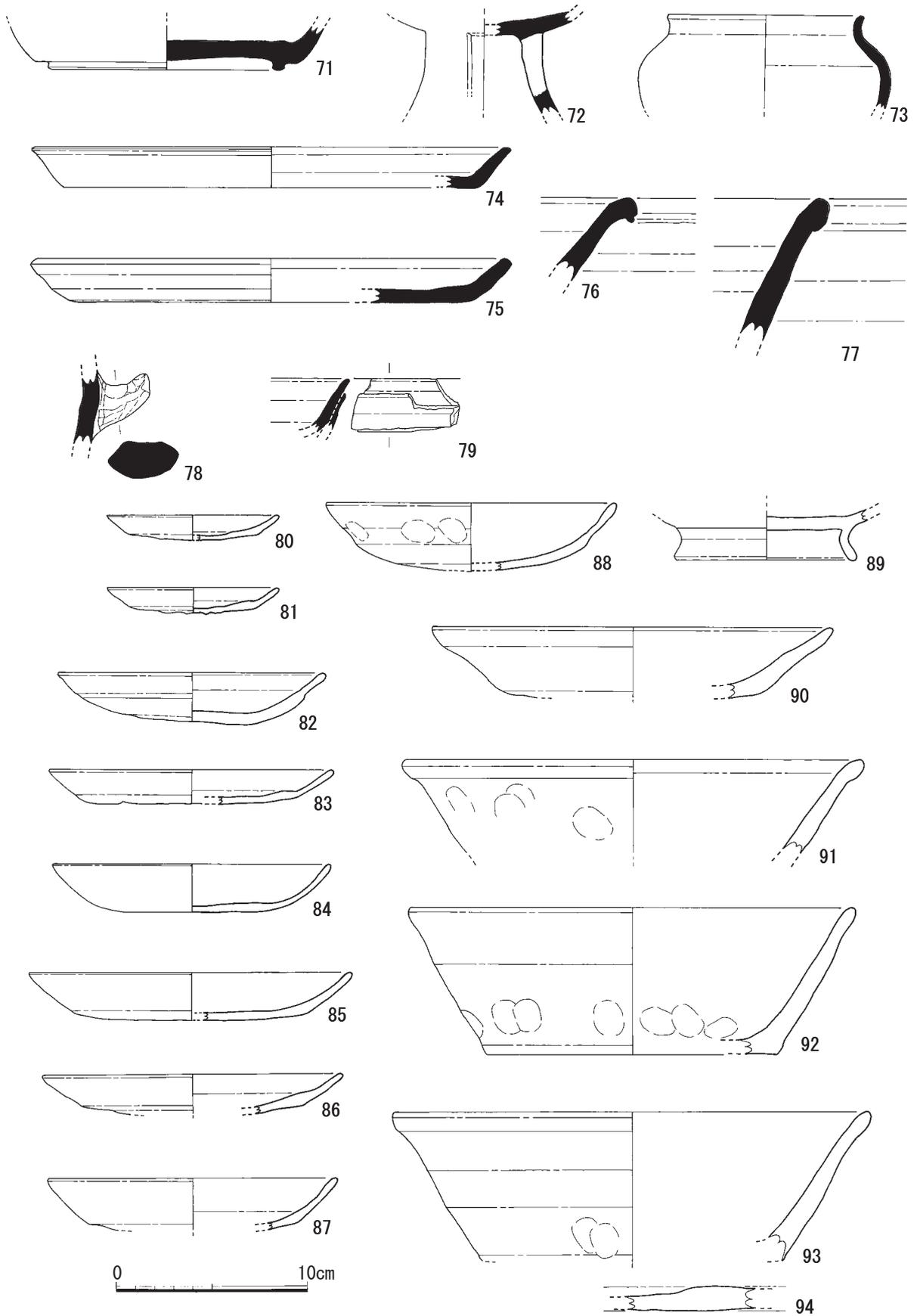
脚 (102) 椀などにつく脚と考えられる。色調は白色で精緻である。

瓦器

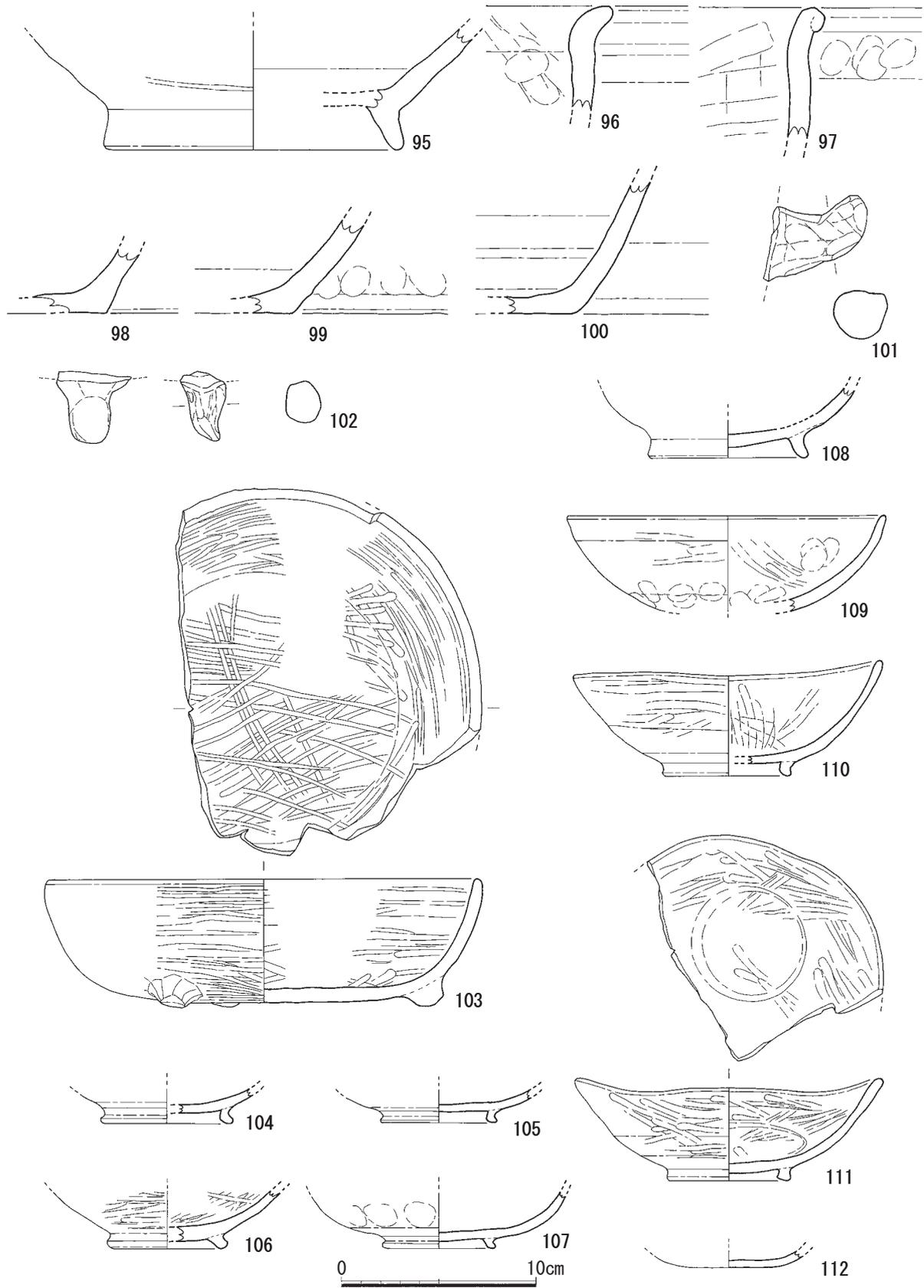
盤 (103) 体部内外面はヨコ方向、底部内面は不定方向のミガキが密に施される。底部外面は体部に近い側を円周方向にケズリ後、ナデ。京都・奈良で12世紀中頃に出現する瓦器盤と考えた^{註2)}。

椀 (104~111) いずれも器壁が薄く、最大で5mm程度であり、高台は高い。104~106は底部内面に密にミガキが施される。107は体部が丸くなる。109はあまり瓦質化していない。110はやや焼き歪んでいる。111も大きく焼け歪み、内面に高台の重ね焼きの痕跡が残る。中島分類瓦器I型式^{註3)}。

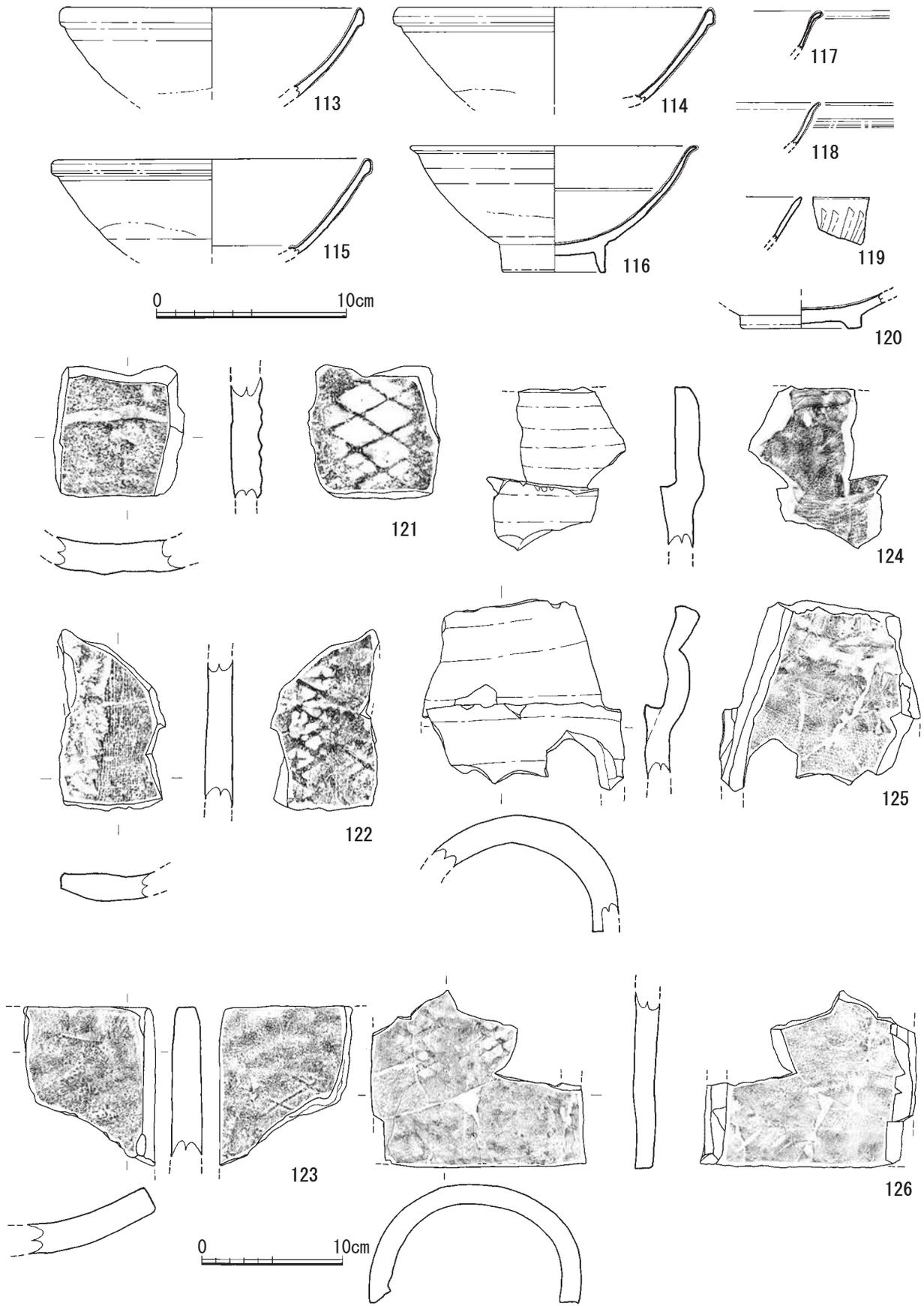
杯 (112) 底部外面には粘土紐巻上げ痕跡が残る。内面のミガキは密である。



第14图 第4次SD01下層出土遺物実測図① (S=1/3)



第15图 第4次 SD01下層出土遺物実測図② (S=1/3)



第16図 第4次 SD01下層出土遺物実測図③ (S=1/3、1/4)

白磁

椀（113～120） 113～115は玉縁状口縁を有する。太宰府陶磁器分類白磁椀Ⅳ類にあたる^{註1)}。116は体部内面中位に沈線を一条巡らし、外面は体部中位まで施釉される。Ⅴ-2類。117はⅤ-3類。118は口縁部が外反する。小片のため時期・産地を特定できない。119は外面に縦方向の篋書きを施す。Ⅴ-2類。120は高台の削り出しが浅く、底部の器肉も厚い。Ⅳ類。

瓦

平瓦（121～123） 121は3.3×2.0cmの粗い斜格子目を有し、中に「十」の文様を施す。122は3.5×1.8cmの粗い斜格子目を有し、中に「十」の文様を施す。123も121と同様の斜格子目を有する。

丸瓦（124～126） 124・125は玉縁部の破片。いずれも焼成はよい。玉縁は、大脇潔のC-1手法によって成型される^{註4)}。125は玉縁から胴部の凹面が部分的に灰色になっており、被熱されたものと考えられる。また側面には断面が残るが、168と接合し、両者は一本で作られたことが分かる。126は広端部の小片で幅は14.8cm。凸面には粗い斜格子文が確認できる。

土製品

棒状土製品（127～136） いずれも正方形から略長方形の断面を有する^{註5)}。132・134は器壁内部まで還元する。127・128・131・133・135は器表面のみ還元する。129・130は還元せず、橙色を呈する。136は屈曲するが、胎土や色調は棒状土製品と近似していることからこの類に含めた。

鈴形土製品（137） 全形は分からないが、鈴形の把手と考えた。橙色を呈する。

土玉（138） 瓦質に焼成されている。137の鈴形土製品の玉の可能性もある。

把手？（139） 瓦質に焼成される。把手としたが、どのような器種につくものか分からない。

器台？（140） 灰白色を呈し、中央に孔が貫通する。

円形土製品（141・143） いずれも円柱状に復元できる。141は還元気味に被熱されており、底面は平らで、中央には孔が開けられる。143は灰白色で焼成不良。

窯壁？（142） 外面は灰色、内面は橙色のスサ入り粘土塊である。瓦器焼成窯の外壁であろうか。

不明製品（144） 瓦質に焼成される。底部から器壁を薄く立ち上げる。外面ナデ、内面ケズリ。

石製品

石鍋（145・146） いずれも縦耳がつく石鍋である。いずれも外面に煤がつく。

バレン状石製品（147） 把手は欠損しており、縦方向に穿孔される。凸面は著しく煤が付着する。

木製品

木筒？（148） 小口は整形されることから木筒の可能性を考えた。文字は確認できない。

動物遺体

馬歯（149） 長さ5.5cm。エナメル質が良好に残る。

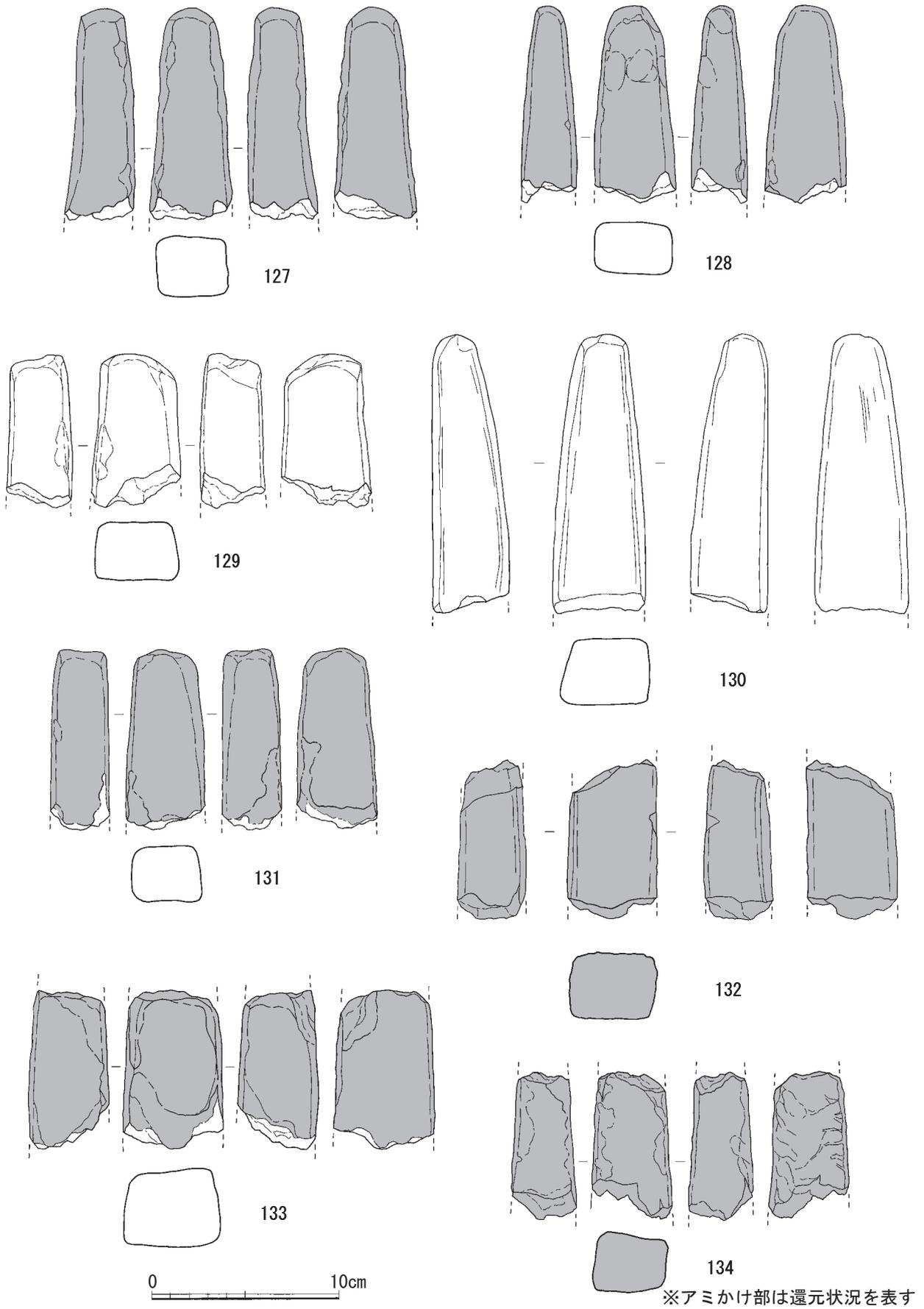
埋土中出土遺物（第20図）

土師器

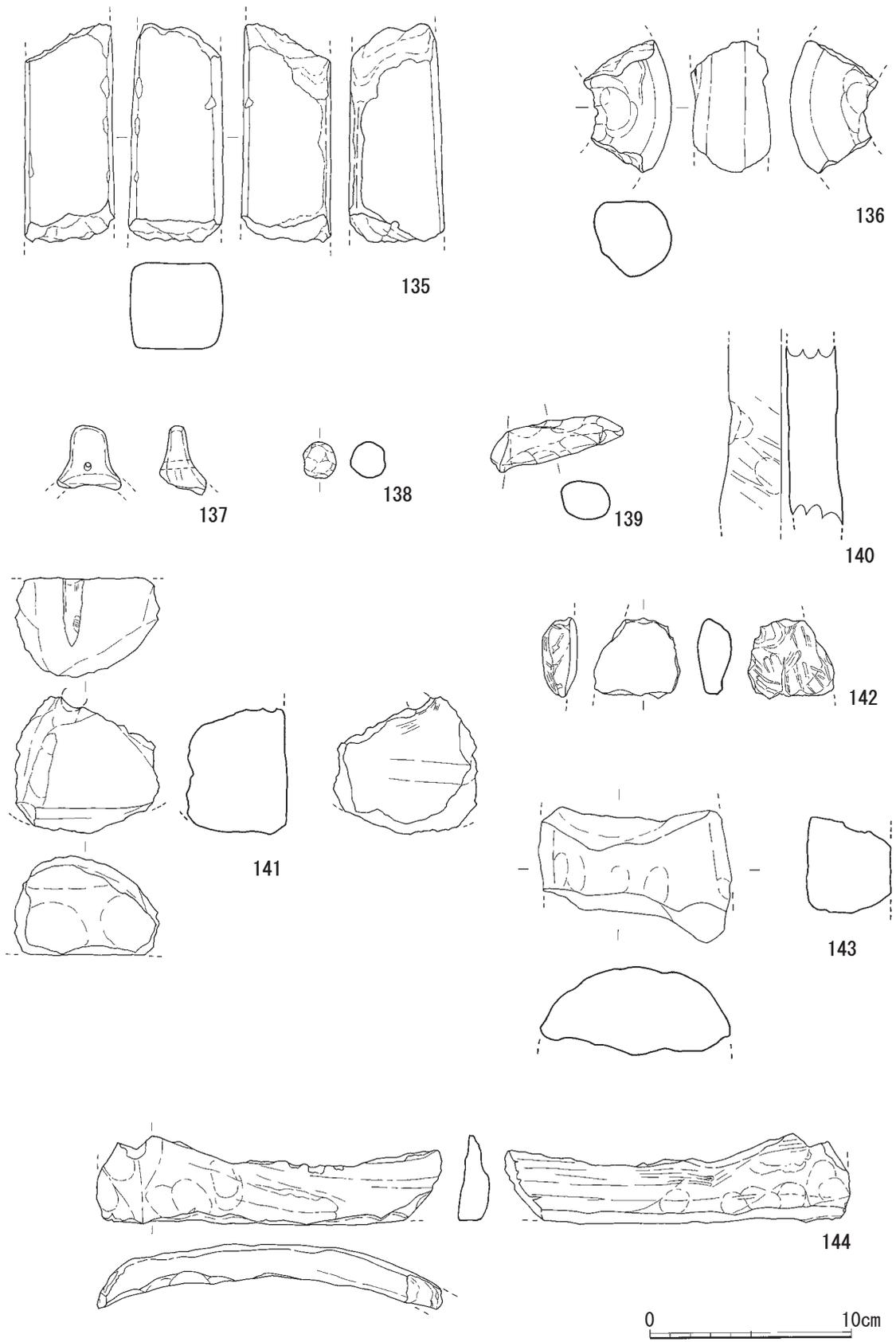
小皿（150） 底部ヘラ切り、板状圧痕が残る。

瓦器

椀（151・152） 151は大きく裂けて焼け歪んでいる。152も大きく焼け歪んでいる。



第17図 第4次 SD01下層出土遺物実測図④ (S=1/3)



第18図 第4次 SD01下層出土遺物実測図⑤ (S=1/3)

土製品

把手? (153) 灰白色を呈する。脚部の可能性もある。

トレンチ内一括出土遺物 (第20図、図版8・9)

溝内のどの位置にトレンチが設定されていたかは不明である。このため、一緒に出土した遺物として報告する。

土師器

甕 (154) 端部は丸く外反する。外面に煤が付着する。

小皿 (155) 底部外面に板状圧痕が残る。内外面ともに煤が付着する。

杯 (156) 底部外面へラ切り。中央部に穿孔が確認でき、内面から開けられたと考えられる。

瓦器

椀 (157) 高台は高く、内外面には密にヘラミガキが施される。

土製品

棒状土製品 (158・159) いずれも内面まで還元する。159は長さ21.0cmで、ゆるやかに湾曲する。

窯壁? (160) スサ入りの粘土塊。一部に黒色の泥のような物が付着している。

瓦

平瓦 (161~166) 161は3.3×6.0cmの極めて粗い斜格子目の中に、さらに菱形の文様を施す。

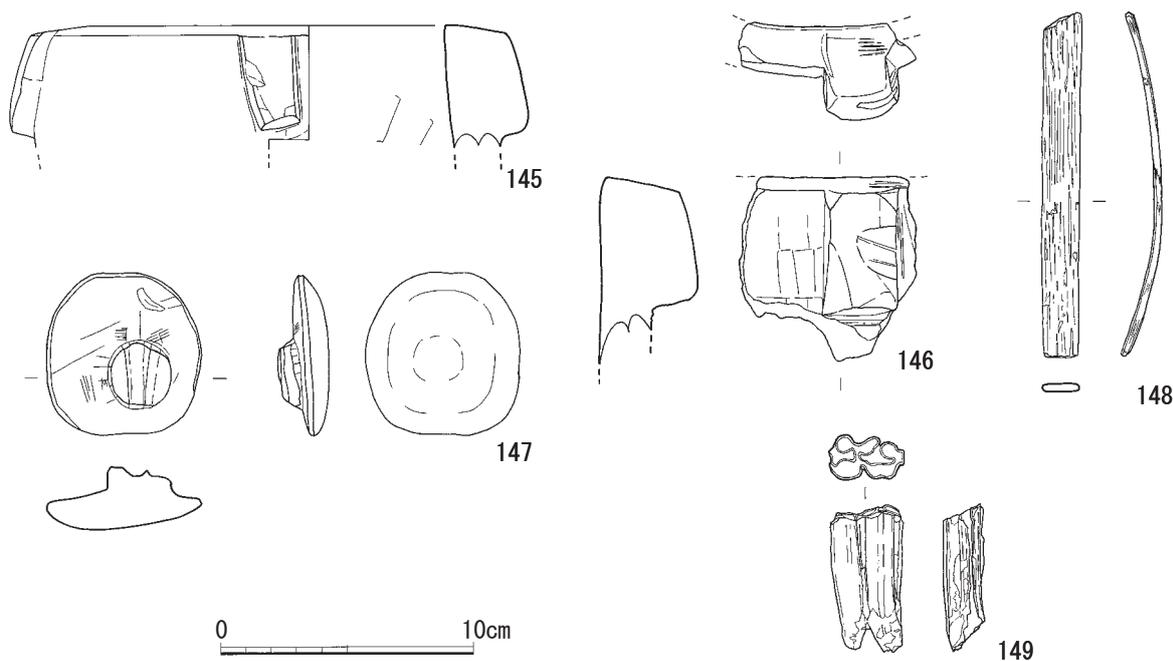
162は焼け歪んでおり、大きく反っている。1.8×2.7cmの斜格子目の中に、「十」や「×」の文様を

施す。163は161とほぼ同じ大きさの斜格子目の中に菱形の文様を施す。広端部の接地面から凹面の

器表面の一部が黒くなっている。164は厚さ2.5cmと極めて厚い。凸面は縦方向のタタキ目が認め

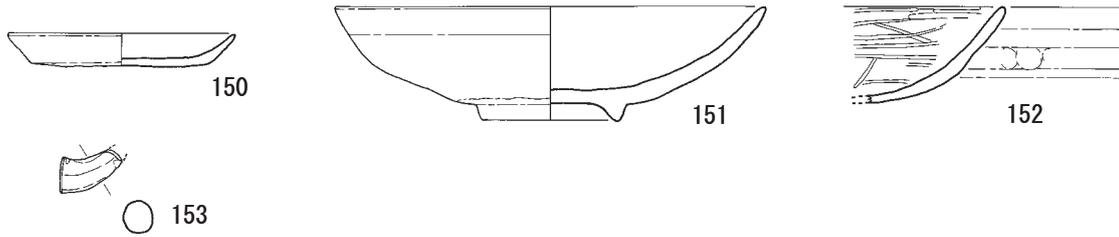
られる。165は161と同様の斜格子目を有する。還元不良。166は1.2×2.2cmの斜格子目を有する。

丸瓦 (167~171) 167は焼成不良。玉縁の成型はC-1手法^{註4)}。171と焼成や色調が近似してお

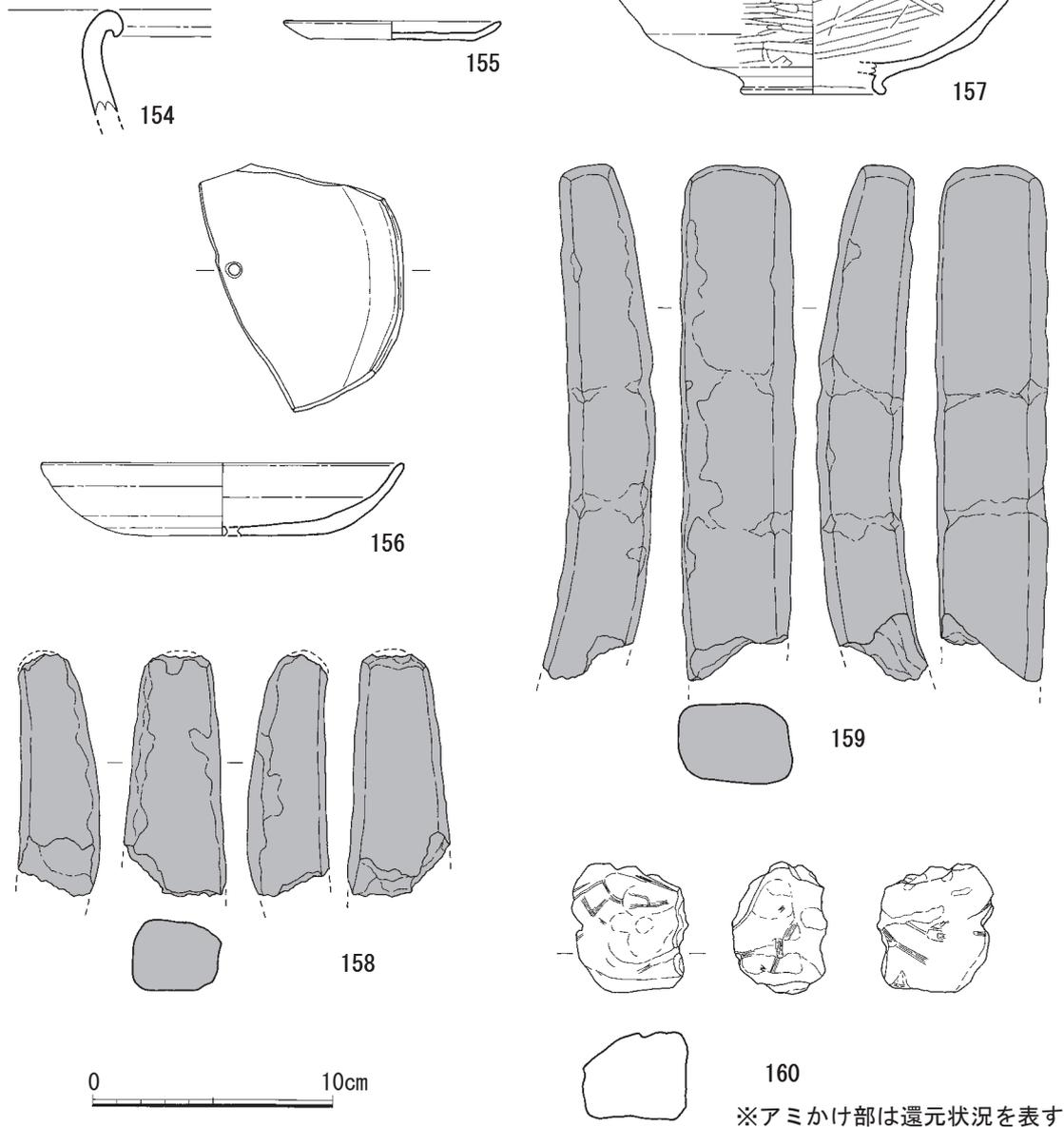


第19図 第4次 SD01下層出土遺物実測図⑥ (S=1/3)

SD01埋土中

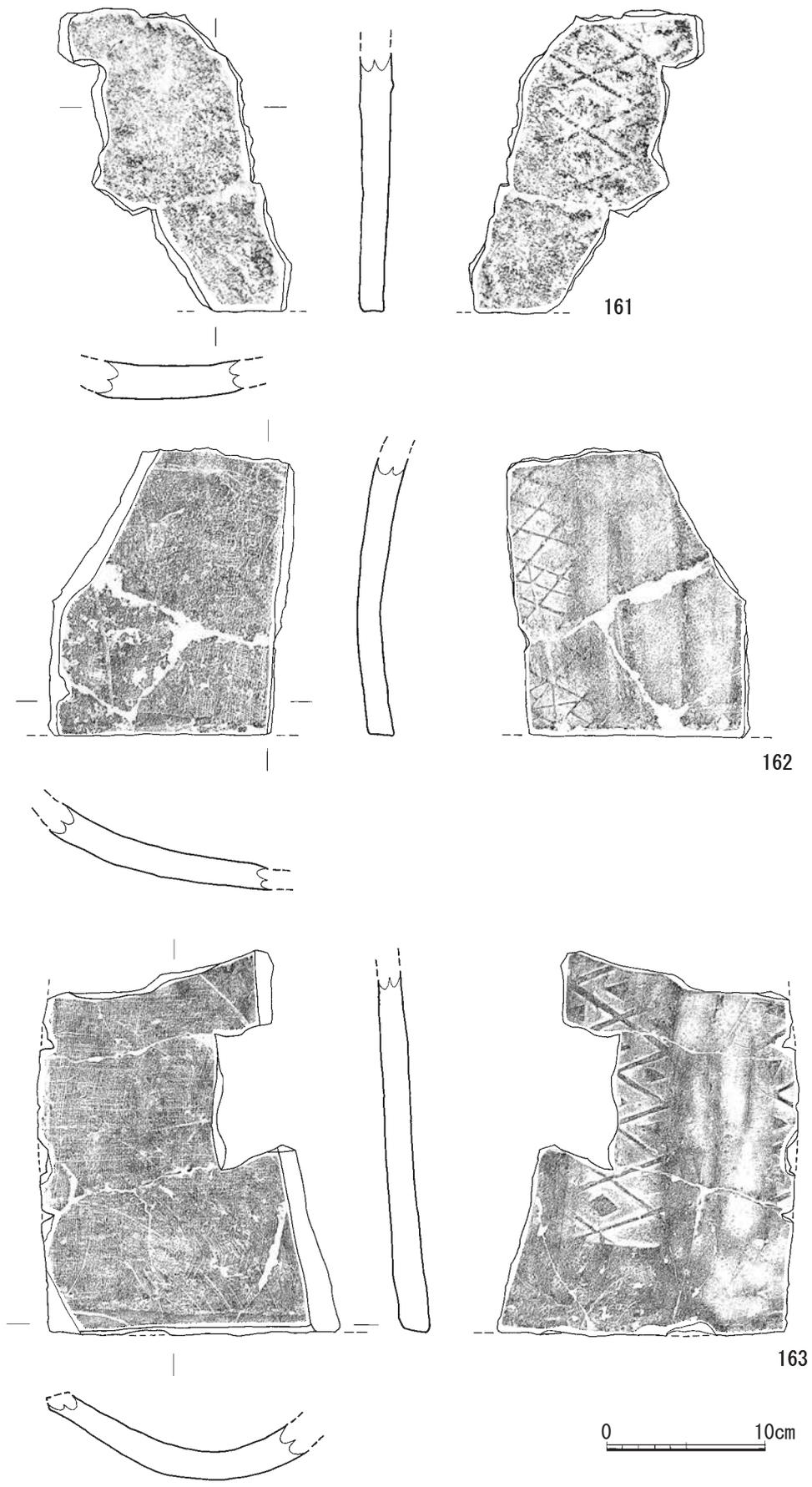


SD01トレンチ内一括

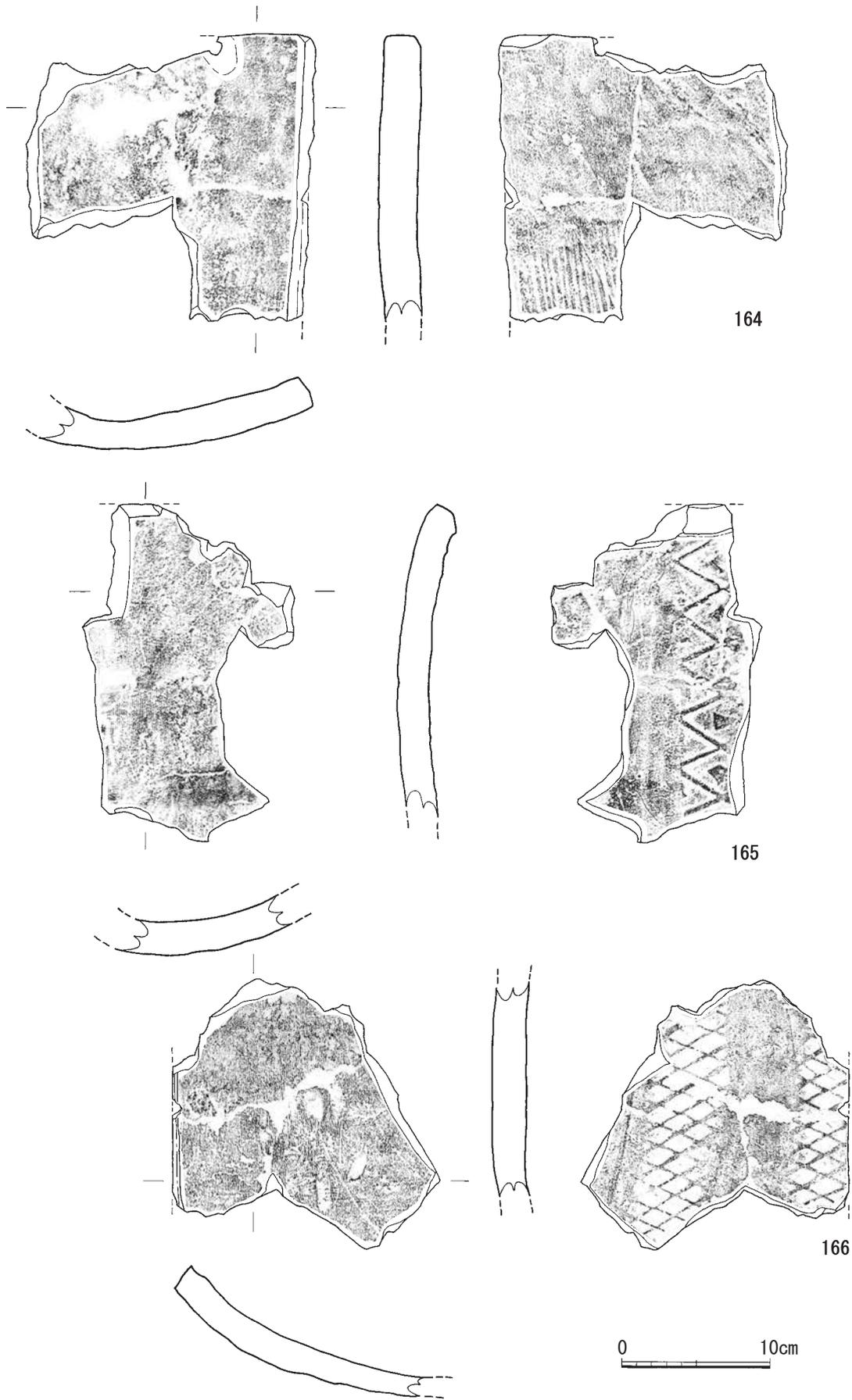


第20図 第4次 SD01埋土中トレンチ内一括出土遺物実測図① (S=1/3)

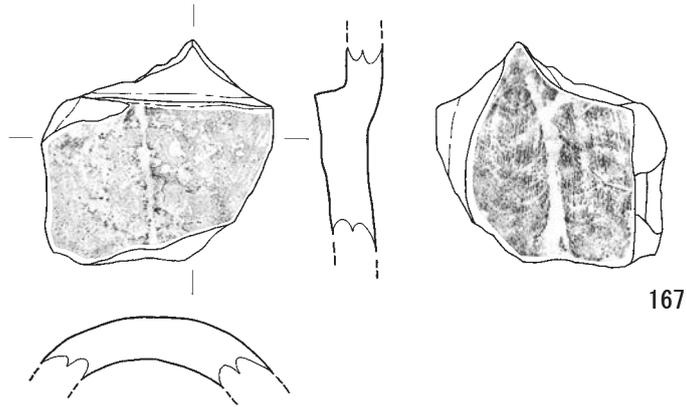
り、同一個体の可能性が高い。168は粗い斜格子文を有する。玉縁の成型はC-1手法。分割截面と破面が残り、凹面側から分割している。125と一本で作られるが、狭端部の径は6cmほどであり、広端部より分割すると考えられる。また、凸面から凹面にかけて煤状のものが付着し、破断面に窯砂のような黒色の付着物が認められる。169は凹面に粗い布目が認められる。170は粗い斜格子文を



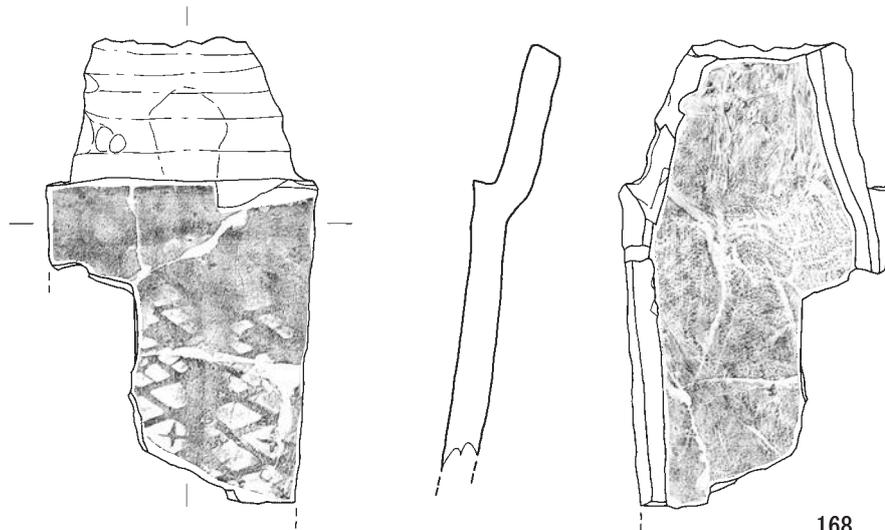
第21図 第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図② (S=1/4)



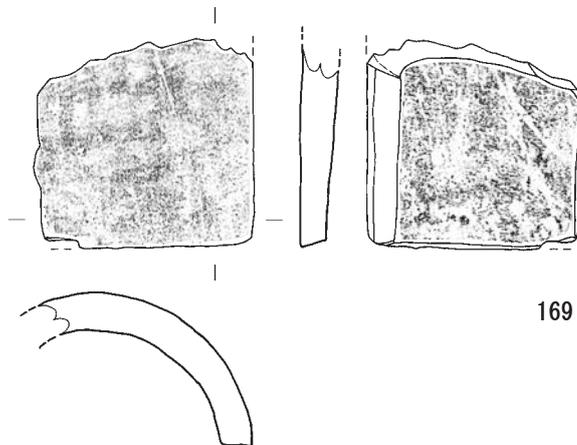
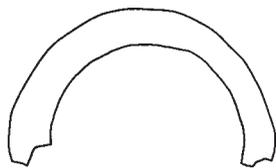
第22図 第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図③ (S=1/4)



167



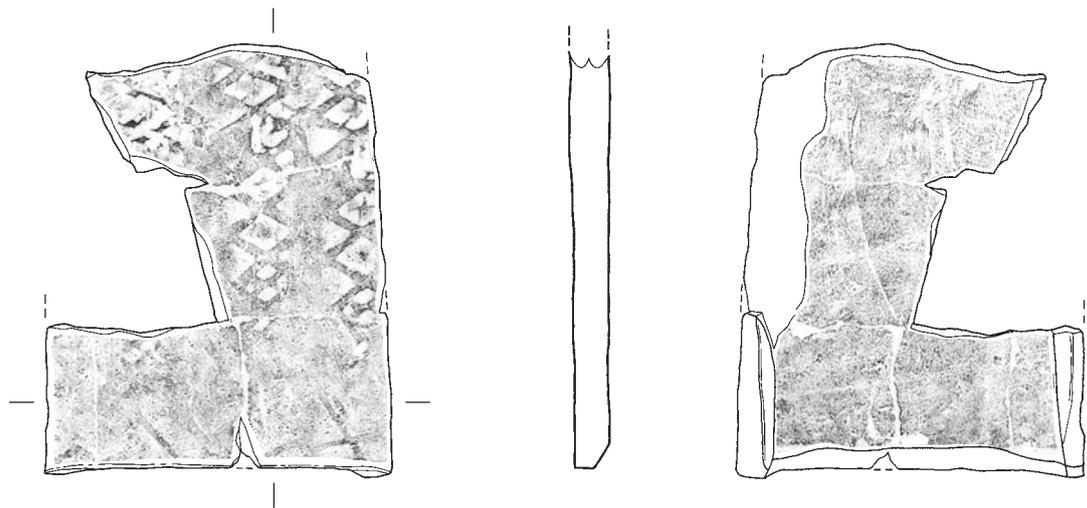
168



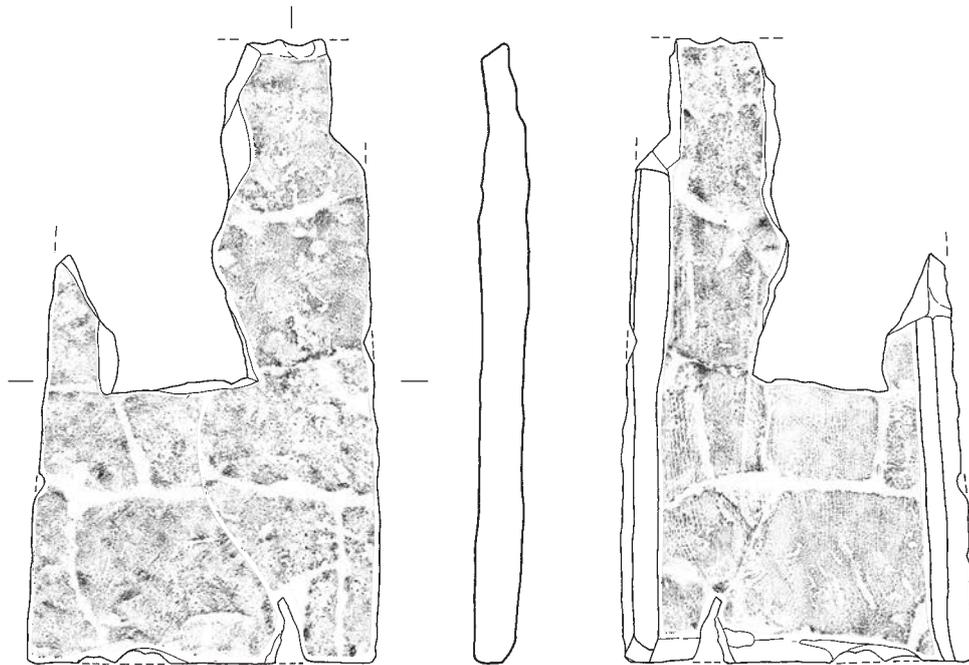
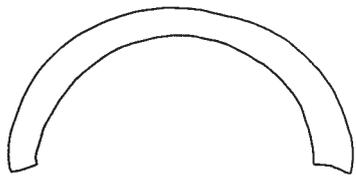
169



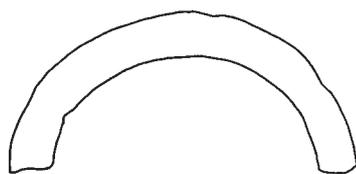
第23図 第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図④ (S=1/4)



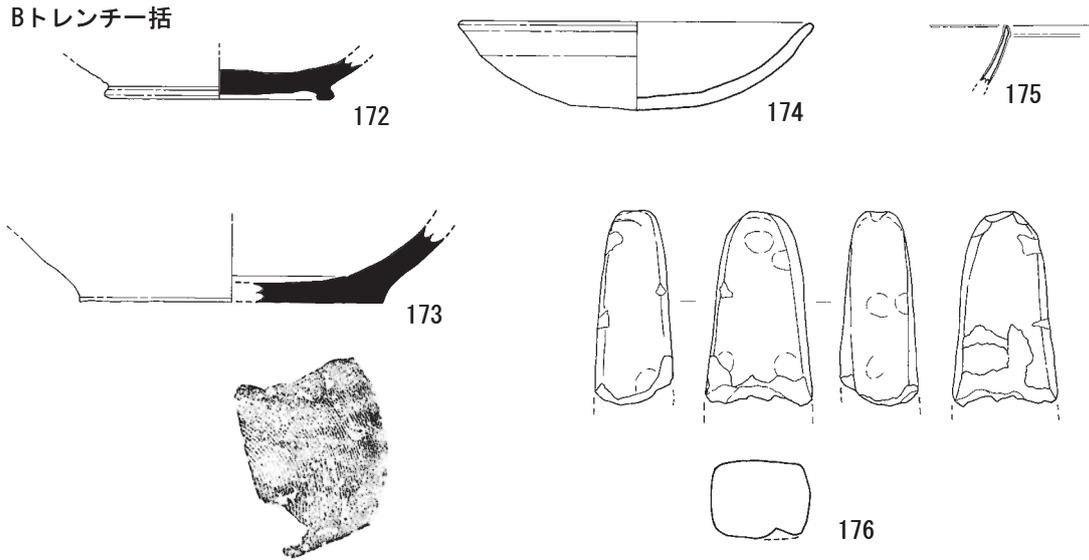
170



171



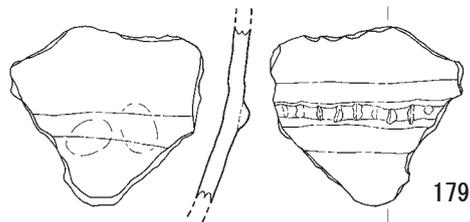
第24図 第4次 SD01トレンチ内一括出土遺物実測図⑤ (S=1/4)



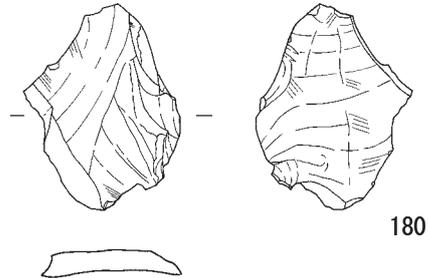
Cトレンチ一括



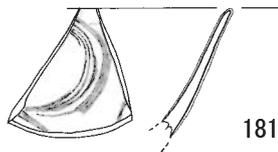
SD01北側小溝



遺構面



表土剥ぎ



0 10cm

0 5cm

第25図 第4次 SD01B・C トレンチ内一括、SX01北側小溝、表土剥ぎ時出土遺物実測図 (S=1/3、1/2)

有する。凸面に黒い窯砂のような付着物があり、煤が広がる。168と同一個体の可能性もある。171は焼成不良。磨滅のため分かりにくいですが、凸面に斜格子文を有する。

Bトレンチ一括出土遺物 (第25図)

須恵器

杯身 (172) 高台部だけの破片である。高台は低く、底部は丸みを持つ。

鉢? (173) 底部だけの破片で全形が分からない。底部糸切り。内面は煤がつく。

土師器

丸底杯（174） 杯部は浅い。底部外面に板状圧痕が確認できる。

白磁

椀（175） 口縁部のみ的小片。端部は小さな玉縁状をなす。太宰府陶磁器分類白磁椀Ⅲ類^{註1)}か。

土製品

棒状土製品（176） 先端部のみ的小片。断面は方形になる。内面まで還元する。

Cトレンチ一括出土遺物（第25図）

須恵器

杯身（177） 底部は丸く、体部は直線的に立ち上がる。体部中位外面に二条の細い沈線を施す。

瓦器

椀（178） 大きく焼け歪んでいる。内外面ともに密にミガキが施される。

SD01北側小溝（第12図、図版6・7）

SD01の北側にあり、矩形に曲がる溝である。幅30cmで東側の調査区外にのびる。出土遺物には、須恵器・土師器があり、おそらくSD01と同様の時期と考えられる。

出土遺物（第25図）

弥生土器

甕（179） 体部中位の小片。低い突帯を貼り付けた後、刻み目を施す。

2) 土坑

SX01（第26図、図版6・7）

調査区の北側で検出され、長辺9.15m、短辺4.0m以上の土坑で、西側は調査区外に広がる。調査時には遺構名称を大型土坑とされていたが、ここではSX01として報告を行う。SX01は略楕円形プランを呈し、検出面からの深さは最も深いところで約60cmほどである。底面はほぼ水平である。出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器・弥生土器・輸入陶磁器などがある。

出土遺物（第27・28図、図版9）

須恵器

杯蓋（182） 口径に対して器高が低く、天井部はほぼ平らになる。体部との境には沈線は浅い。

杯身（183・184） 183は杯部が深く、口縁部の立ち上がりはやや内傾する。口唇部下に浅い沈線が巡る。184は整形後に意図的に押しつぶしたようである。口縁部と受部の一部に赤い粒状の物質が付着する。

甕（185・186） 185は頸部から体部の破片。186はほぼ完形に復元できるが、体部の一部は破断状況から焼成時に破損したようである。いずれも外面擬格子タタキ後カキメ、内面同心円当て具痕が残る。

土師器

甕（187・188） 187は大きく開く口縁部を有する。外面に煤がつく。内面ヘラ削り。188は底部のみ破片。外面縦方向のハケメ、内面はヘラ削りを施す。底部付近に煤が付着する。

小皿（189） 小形で扁平である。磨滅のため調整が不明だが、底部は平らで糸切りの可能性がある。

弥生土器

甕（190～193） 190は頸部は大きく外方にのびる。191～193は底部片。191はやや上げ底になる。192・193は底部に丸みを持ち、193は外面にタタキを有する。

高杯（194～196） 194は杯部は丸みを持ち、脚部は大きく開く。195は裾部が大きく広がり、三方向に円孔を穿つ。196は長い脚柱部を有する。杯部は大きく開くようである。

器台（197） 口縁部と脚部を失う。磨滅により調整不明。

白磁

椀（198） 高台部のみ的小片。高台は細く高い。太宰府陶磁器分類白磁椀Ⅴ類^{註1)}。

青磁（199） 口縁部のみ的小片。内外面とも貫入が著しい。太宰府陶磁器分類龍泉窯系椀Ⅰ類^{註1)}。

石器

石庖丁（200） やや大型のものである。刃部は両刃、円孔が2つ確認できる。片岩製。

石鏃（201） 完形である。小型で基部の抉りは深い。黒曜石製。

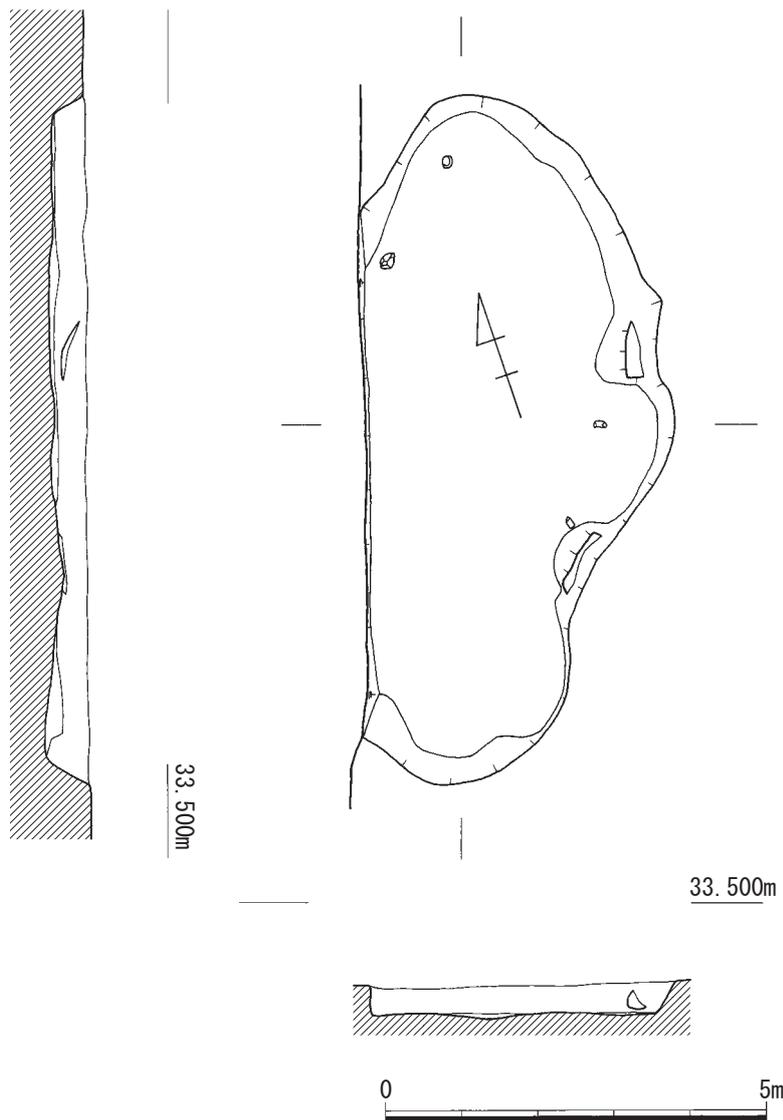
鉄滓（202） 22.8gの小型のものである。着磁が認められる。

3) その他の出土遺物

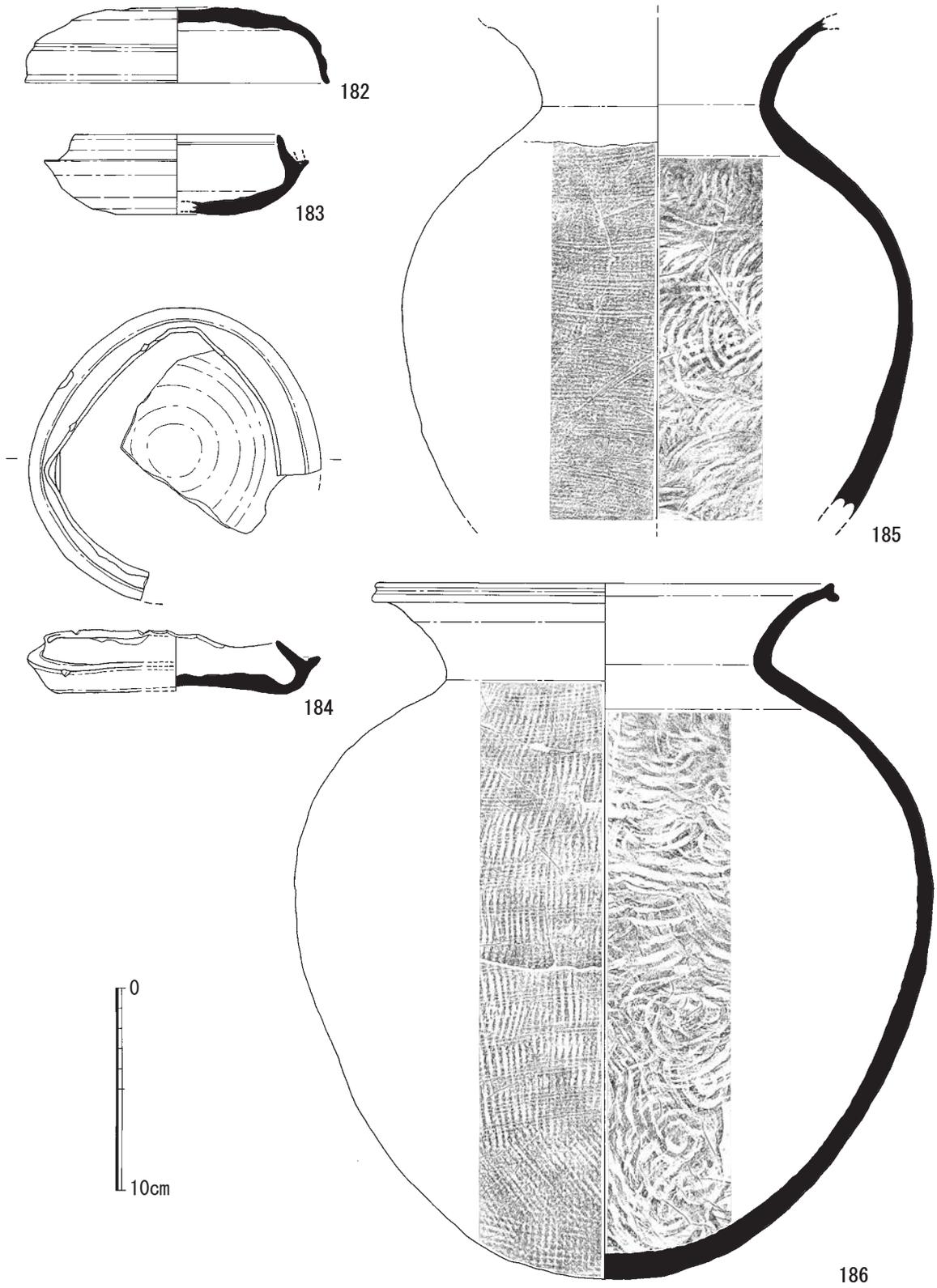
遺構面・表土剥ぎ出土遺物（第25図）

青磁

椀（181） 体部のみ的小片。内面に草花文を施す。太宰府陶磁器分類龍泉窯系椀Ⅰ類^{註1)}。



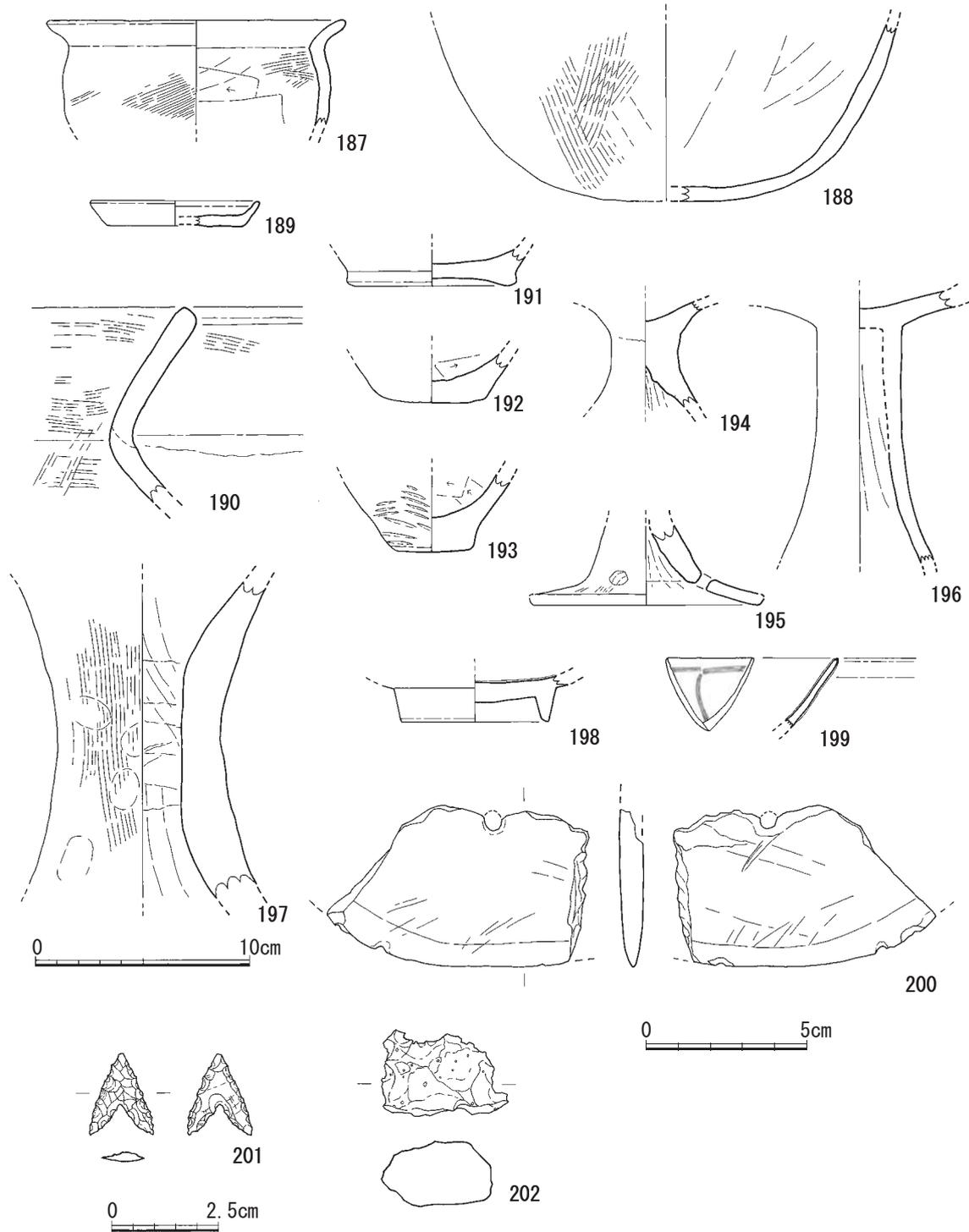
第26図 第4次SX01遺構実測図（S=1/100）



第27図 第4次 SX01出土遺物実測図① (S=1/3)

石器

剥片 (180) 安山岩。風化が著しい。新たな剥離痕は認められない。



第28図 第4次 SX01出土遺物実測図② (S=1/3、2/3、1/2)

(3) 小結

ここで第4次調査の遺構と遺物についてまとめておく。出土遺物には、縄文時代晩期、弥生時代前期・後期のものが含まれることから、この時期の活動があったと考えられるが、遺構としては明らかでない。

遺構としては、SX01とした大型の土坑は、最下層の出土遺物に龍泉窯系青磁碗を含んでいるが、土師器小皿・杯は全体として極めて少ない。出土遺物の主たるものは小田編年ⅢB期のものであることから、時期が新しい遺物については取り上げの際に過誤があったものか、遺構の切り合いを見落とした可能性を考えておく。

SD01は出土した遺物の年代観から、11世紀後半～12世紀前半と考えられる。出土遺物には、焼け歪んだ瓦器の他に還元された棒状土製品を大量に含んでおり、窯壁かと考えられるスサ入り粘土塊も確認できることから、瓦器焼成窯が近辺に存在したものと考えられる。

また極めて粗い斜格子文を持つ丸瓦・平瓦^{註6)}が出土しており、この時期の寺院があったと推定されてきたが、軒瓦や道具瓦を欠くことと、瓦の量が少ないこと、焼け歪みのある瓦を含むことから、何らかの道具として持ち込まれたものと考えられる。丸瓦の中には、125・168のように半截された丸瓦同士が一本に接合するものがあり、瓦生産工人との関わりを推定させる。

こうした瓦器生産と瓦生産工人との関わりについて、現在は否定的にとらえる見解が主流である^{註7)}。上園遺跡は、西日本最大級の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群が6世紀中頃に開窯した地域であり、9世紀中頃と考えられる操業終了から約200年の時を経て瓦器窯が開かれるのは、近辺に瓦器製作に適した粘土が存在したことが主な理由と考えられる。しかし、163のように燻されたような瓦や、煤がついた瓦が存在すること、一本に接合する丸瓦があることを考えると、瓦器生産が上園遺跡で開始される際に、既存の瓦工人の技術協力を得て進められたと考えてよいのではなかろうか。こうした視点も含めて、上園遺跡周辺における瓦器生産の在り方の課題と考える。

註1 太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集

註2 立石堅志1995「10 瓦質土器〔奈良火鉢〕」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

註3 中島恒次郎1992「大宰府における碗形態の変遷」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会

註4 大脇潔1991「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所学報第49冊 奈良国立文化財研究所

註5 長安慧2016「棒状土製品から見た中世の窯業」『七隈史学』第18号 七隈史学会

註6 瓦の年代観は、栗原和彦2002「第Ⅳ章出土遺物 (1) 瓦磚類」『大宰府政庁跡』九州歴史資料館より、第5段階後半。太宰府市教育委員会2005『宝満山遺跡群4』太宰府市の文化財第79集より、大宰府瓦格子目叩きI—Cc類、編年F群にあたりと考えた。

註7 森隆1994「中世土器の焼成窯」『中近世土器の基礎研究Ⅹ』日本中世土器研究会

第1表 第3次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)			
1	土師器	椀	5住埋土中 (床面ごく近く)	②<2.35> ④7.7	外面調整不明 内面ヨコナデ	A:2mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
2	瓦器	椀	5住埋土中 (床面ごく近く)	②<2.2>	内外面ミガキ	A:1mm以下の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外10YR3/1 黒褐色	
3	土師器	甕	溝2-A	②<5.7>	外面カキメ 内面調整不明	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内5YR5/4 にぶい赤褐色~5YR5/2 灰褐色 外10YR8/3 浅黄橙色	
4	須恵器	杯蓋	SD15切り合い部 (新)	②<0.96>	内外面回転ナデ	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内N6/灰色 外N5/灰色	
5	須恵器	杯身	SD15切り合い部 (新)	②<2.4>	外面回転ナデ 内面調整不明	A:1mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N6/灰色	
6	須恵器	杯	溝1-A区	②<1.2>	底部外面ヘラ切り 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内7.5Y7/1 灰白色 外N6/灰色	
7	須恵器	高杯蓋	溝1-C区	②<1.6> つまみ径3.2 つまみ高0.9	外面回転ナデ 内面不定方向ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/灰白色	
8	須恵器	甕	SD15切り合い部 (新)	①<19.2> ②<3.0>	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/灰白色~N3/暗灰色	口縁部内面降灰
9	土師器	小皿	SD15C-D区間 ベルト上層	②<1.2>	内外面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外2.5Y8/1 灰白色	
10	土師器	鉢(手捏ね)	溝1-C区	②<3.85>	外面調整不明 内面指オサエ	A:3~4mmの長石を含む B:やや不良 C:内外10YR7/2 にぶい黄橙色	
11	土師器	鉢	溝1-A区	①<21.6> ②<5.2>	口縁部内外面指オサエ 他はナデ	A:3mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内外7.5YR7/3 にぶい橙色	No12と同一の可能性あり
12	土師器	鉢	溝1-A区	②<3.15> ③<13.45>	底部外面ナデ 体部外面ヨコナデ 内面指オサエ	A:5mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内7.5YR8/2 灰白色~7.5YR5/1 褐色 外10YR8/2 灰白色~10YR4/1 褐色	No11と同一の可能性あり
13	瓦器	椀	溝1-A区	②<3.0> ④6.7	体部内外面ミガキ 体部外面下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・石英・雲母を含む B:良好 C:内外2.5Y3/1 黒褐色	
14	瓦器	椀	溝1-B区	②<2.15> ④7.0	底部~体部下位指オサエ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内2.5Y4/1 黄灰色 外10YR7/2 にぶい黄 橙色~10YR3/1 黒褐色	底部外面板状圧痕あり
15	瓦器	椀	溝1-A区	②<3.5> ④<6.6>	体部外面下位指オサエ 体部内面下位ミガキ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y3/1 黒褐色~2.5Y2/1 黒色 外5Y5/1 灰色~5Y3/1 オリーブ黒色	
16	瓦器	椀	溝1-B区	①<14.9> ②<3.2>	外面ミガキ一部指オサエ 内面ミガキ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外10YR4/1 褐色~10YR3/1 黒褐色	
17	瓦器	椀	表土剥ぎ時	①<17.0> ②5.3 ④<5.7>	底部~体部下位指オサエ 体部内面ミガキ 他は回転ナデか	A:1mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色~10YR3/1 黒褐色 外10YR8/3 浅黄橙色~7.5YR7/6 橙色	
18	瓦	平瓦	溝1-C区	残存長11.9 最大幅8.0 厚さ1.8	凸面縄目痕 凹面布目痕	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:やや不良 C:内外10YR8/1 灰白色	
19	縄文土器	鉢	溝1-C区	②<4.1>	外面条痕 内面指オサエ	A:3mm以下の白色砂粒・長石・角閃石・雲 母を含む B:良好 C:内外7.5YR6/4 にぶい橙色	
20	縄文土器	深鉢?	溝1-C区	②<6.3>	口縁部端部ヨコナデ 他は調整不明	A:5mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内7.5YR6/4 にぶい橙色 外5YR5/6 明赤 褐色~7.5YR6/4 にぶい橙色	
21	弥生土器	甕	溝1-D区	②<1.95>	口縁部外面刺突文あり 他は調整不明	A:3mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外10YR3/1 黒褐色	
22	須恵器	甕	P-1	①<9.9> ②<2.2>	内外面回転ナデ 外面波状文を施す	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/灰白色	
23	土師器	鍋	P-1	②<1.1>	内外面調整不明	A:2mm以下の長石・微細な白色砂粒・石英・ 雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
24	須恵器	高杯	P-13	つまみ径3.9 つまみ高1.1	外面ナデ 内面調整不明	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外5YR6/4 にぶい橙色~5YR5/6 明赤褐 色	
25	須恵器	甕	P-15	②<1.7>	内外面回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外N7/灰白色~N4/灰色	

第2表 第3次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)			
26	土師器	椀	P-16	②<(2.25) ④<(6.8)	内外面ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色	
27	瓦器	椀	P-17	①<(15.1) ②<(4.2)	内外面ミガキ 内面コテ当て痕あり 底部内面指オサエ痕あり	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外 N4/ 灰色～N3/ 暗灰色	
28	須恵器	甕	P-19	②<(6.9)	外面擬格子叩き 内面同心円文当て具痕あり	A：3mm以下の白色砂粒・黒色粒を含む B：良好 C：内 N7/ 灰白色 外 N5/ 灰色～N4/ 灰色	外面別個体付着
29	土師器	丸底杯	P-19	①<(15.9) ②<(3.5)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR7/2 にぶい黄褐色～10YR5/1 褐灰色	
30	土師器	甕	P-22	①<(28.0) ②<(8.15)	外面上位工具ナデ一部指オサエあり 内面指オサエ	A：4mm以下の長石・微細な白色砂粒・角閃石・雲母を含む B：良好 C：内外10YR8/2 灰白色	
31	瓦器	椀	P-22	①<(16.0) ②<(4.7)	内外面ミガキ 内面上位コテ当て痕あり	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外2.5Y4/1 黄灰色～2.5Y2/1 黒色	
32	石製品	砥石	P-23	最大長11.55 最大幅4.75 最大厚4.0			砂岩製？
33	瓦器	椀	P-27	①<(16.0) ②<(4.1)	内外面ミガキ 外面下位指オサエ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR2/1 黒色	
34	土師器	小皿	P-29	①<(10.0) ②<1.4 ③<(7.0)	底部外面へラ切り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒・角閃石・雲母を含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色	底部外面板状圧痕あり
35	須恵器	杯蓋	P-61	②<(2.5)	内外面回転ナデ 外面中位に一条の沈線あり	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外 N6/ 灰色	
36	須恵器	杯身	P-69	①<(11.05) ②<4.45 受部径(13.45)	底部外面回転へラケズリ後ナデ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒・黒色粒・雲母を含む B：不良 C：内10YR8/1 灰白色 外10YR8/1 灰白色～10YR6/6 明黄褐色	
37	須恵器	杯蓋	遺構検出面一括	①<(12.35) ②<(3.1)	天井部外面回転へラケズリ 他は回転ナデ	A：1mm以下の白色砂粒を含む B：不良 C：内5YR6/4 にぶい橙色 外5YR4/3 にぶい赤褐色	
38	須恵器	杯蓋	遺構検出面一括	②<(2.4)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：不良 C：内5YR5/6 明赤褐色 外5YR4/6 赤褐色	
39	須恵器	杯蓋	遺構検出面	②<(1.4)	外面回転へラケズリ 内面1/2不定方向ナデ・1/2回転ナデ	A：2mm以下の白色砂粒を含む B：良好 C：内 N7/ 灰白色 外 N4/ 灰色	
40	須恵器	杯身	表土～遺構面(表土剥時出土)	①<(12.3) ②<(3.8) 受部径(14.6)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内 N5/ 灰色 外 N6/ 灰色～5Y6/1 灰色	外面降灰
41	須恵器	杯身	表土～遺構面(表土剥時出土)	②<(1.1) ④<(8.5)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外 N5/ 灰色	
42	須恵器	杯	遺構検出面	②<(2.65) ③<(8.8)	底部外面へラ切り 他は回転ナデ	A：1mmの長石・微細な白色・黒色粒を含む B：良好 C：内7.5YR7/4 にぶい橙色 外2.5Y5/1 黄灰色	
43	須恵器	杯	表土剥ぎ時	②<(2.5) ④<(9.15)	底部外面へラ切り 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外 N6/ 灰色～N5/ 灰色	
44	須恵器	高杯	北西スミ溝埋土中一括	②<(3.2) 脚部径(9.8)	外面上位カキメ 他は回転ナデ 透かしあり	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外 N6/ 灰色～N5/ 灰色	内外面降灰
45	須恵器	高杯	遺構検出面一括	②<(4.1) 脚部径(9.2)	外面～内面下位回転ナデ 内面上位ナデ	A：微細な白色砂粒・長石・雲母を含む B：良好 C：内外10YR7/3 にぶい黄褐色	
46	須恵器	甕	表土～遺構面(表土剥時出土)	②<(2.15)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒・石英・雲母を含む B：良好 C：内2.5Y6/2 灰黄色 外5Y3/1オリブ黒色	
47	須恵器	横瓶？	包含層(?)トレンチ内	①<(15.0) ②<(5.25)	内外面回転ナデ	A：微細な白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：内外5Y6/1 灰色	
48	須恵器	甕	遺構検出面一括	②<(1.45)	内外面回転ナデ 口縁部外面端部波状文を施す 外面に一条の沈線あり	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内5Y6/1 灰色 外 N5/ 灰色～N3/ 暗灰色	
49	須恵器	甕	遺構検出面	②<(4.5)	内外面回転ナデ	A：微細な白色・黒色粒を含む B：良好 C：内外 N6/ 灰色～N3/ 暗灰色・7.5Y5/1 灰色	外面降灰
50	須恵器	甕	遺構検出面一括	①<(25.2) ②<(5.25)	内外面回転ナデ 頸部外面わずかに斜文が残る	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内 N7/ 灰白色～N3/ 暗灰色 外 N6/ 灰色	内面降灰
51	須恵器	釉着資料	遺構検出面一括	②<(1.65)	全面回転ナデ	A：微細な白色・黒色粒を含む B：良好 C：内外 N7/ 灰白色～N2/ 黒色	2個体釉着
52	須恵器	釉着資料	北西スミ溝埋土中一括	②<(3.3)	回転へラケズリ 回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内 N7/ 灰白色 外2.5Y5/1 黄灰色	降灰
53	土師質土器	鉢	遺構検出面	②<(7.1)	口縁部端部ヨコナデ 他はナデ	A：2mm以下の白色砂粒を含む B：良好 C：内10YR8/2 灰白色 外10YR7/3 にぶい黄褐色	

第3表 第3次調査出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
54	瓦器	椀	遺構検出面	②<4.6> ④(6.4)	底部外面回転ナデ 他はミガキ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐灰色 外10YR2/1 黒色	
55	瓦	平瓦	表土～遺構面 (表土剥時出土)	残存長5.65 残存幅4.4 厚さ1.7	凸面斜格子文叩き 凹面ケズリ・ナデ 側面ヘラ切り	A:微細な白色・黒色粒を含む B:良好 C:凹凸面 N7/ 灰白色	
56	青磁	椀	表土剥き時	②<2.8> ④(5.2)	内外面施釉 豊付け一部露胎	A:精良 B:良好 C:釉5Y5/3 灰オリーブ色 胎土2.5Y7/2 灰黄色	高麗青磁
57	鉄製品	鉄鎌	表採	残存長3.2 最大幅0.9 最大厚0.6 重さ4.4g			
58	鉄製品	鉄鎌	遺構検出面一括	残存長3.55 残存 幅1.0 厚さ0.5 重さ3.3g			茎部に木質がわずかに残る

第4表 第4次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
59	土師器	小皿	大溝埋土上層	①(10.0) ②1.4 ③(6.7)	底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	底部外面板状圧痕あり
60	土師器	椀	大溝埋土上層	①(18.0) ②6.0 ④(7.2)	底部外面回転ナデ 体部中位内外面指オサエ 他は調整不明	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色～5YR7/8 橙色	
61	土師器	椀	大溝埋土上層 (東区)	②<3.0> ④(11.0)	底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内外10YR8/2 灰白色	
62	土師器	丸底杯	大溝上層	①(14.0) ②3.45	底部外面ヘラ切り? 体部外面下位指オサエ? 内面調整不明	A:2mm以下の白色砂粒・長石を含む B:良好 C:内外10YR8/1 灰白色～10YR8/3 浅黄橙色	
63	瓦器	椀	大溝埋土上層	①16.8 ②5.3 ④6.9	底部外面ヘラ切り 内面～体部外面中位ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色～2.5Y6/1 黄灰色～ 2.5Y3/1 黒褐色 外10YR8/2 灰白色～2.5Y3/1 黒褐色	焼け歪みあり
64	瓦器	椀	大溝埋土上層 (東区)	①(17.0) ②<4.2>	内外面ミガキ	A:2mm程の長石類を含む B:良好 C:内10YR2/1 黒色 外10YR2/1 黒色～10YR6/1 褐灰色	
65	瓦器	椀	大溝埋土 上層(砂層)	②<4.5>	内面ミガキ 体部下位内外面指オサエ 高台部外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内 N4/ 灰色 外5Y6/1 灰色～N3/ 暗灰色	焼け歪みあり
66	白磁	椀	大溝埋土上層	②<3.7>	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉2.5Y7/2 灰黄色 胎土2.5Y8/1 灰白色	白磁椀V類
67	白磁	椀	大溝埋土上層 (東区)	②<3.1>	内外面施釉	A:気泡多し、やや良 B:良好 C:釉5Y7/2 灰白色 胎土5Y8/1 灰白色	白磁椀V類
68	白磁	椀	大溝埋土上層	②<2.5>	内外面施釉	A:気泡多し、粗 B:良好 C:釉2.5Y7/2 灰黄色 胎土2.5Y8/1 灰白色	白磁椀V類
69	弥生土器	壺	大溝上層	②<5.3>	内外面調整不明	A:3mm以下の長石・石英を含む B:良好 C:内10YR6/2 灰黄褐色 外10YR8/1 灰白色 ～10YR5/1 褐灰色	
70	土製品	棒状 土製品	大溝上層	残存長16.0 最大 幅4.0 最大厚2.9	全面調整不明	A:3mm以下の長石類を含む B:良好 C:2.5Y8/1 灰白色・2.5Y5/1 黄灰色・10YR3/1 黒褐色	被熱による黒変あり
71	須恵器	杯身	大溝下層	②<2.2> ④(12.2)	底部外面ナデ 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒、2mmの長石を含 む B:良好 C:内外 N5/ 灰色	
72	須恵器	高杯	大溝下層(東区)	②<5.1> 脚基部径(6.0)	内外面回転ナデか? 3方向透かし	A:3mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外 N5/ 灰色	
73	須恵器	短頸壺	大溝下層	①(10.1) ②<4.8> ⑤(13.0) 頸部径(10.0)	内外面回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内 N3/ 暗灰色 外5Y5/1 灰色～N3/ 暗灰 色	口縁部外面降灰 外面別個体付着
74	須恵器	盤	大溝下層	①(24.8) ②2.1 ③(21.4)	底部外面ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外5Y7/1 灰白色	
75	須恵器	盤	大溝下層	①(25.0) ②2.3 ③(21.0)	底部外面ヘラケズリ 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色砂粒、2mmの長石を含 む B:良好 C:内 N6/ 灰色 外7.5Y5/1 灰色～ N7/ 灰白色	
76	須恵器	甕	大溝下層	②<4.35>	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内5Y7/1 灰白色～5Y5/1 灰色 外N7/ 灰 白色	内面降灰
77	須恵器	甕	大溝下層	②<7.45>	内外面回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内 N6/ 灰色 外5RP7/1 明紫灰色～N4/ 灰色	
78	須恵器	把手 付甕	大溝下層	②(3.95)	ナデ成形	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外10Y5/1 灰色	

第5表 第4次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)			
79	須恵器	釉着資料	大溝下層	②<2.8	内外面回転ナデ	A：微細な白色・黒色砂粒を含む B：良好 C：内 N6/ 灰色 外 N6/ 灰色～ N3/ 暗灰色	外面別個体付着
80	土師器	小皿	大溝下層	①(9.0) ②1.3 ③(6.8)	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外10YR8/2 灰白色～10YR7/4 にぶい黄 橙色	底部外面板状圧痕 あり
81	土師器	小皿	大溝下層	①(9.0) ②1.4 ③6.4	底部内面ナデ 他は回転ナデ	A：微細な砂粒を少量含む B：良好 C：内外10YR8/2 灰白色～7.5YR7/6 橙色	底部外面板状圧痕 あり
82	土師器	杯	大溝下層	①14.0 ②2.75	内外面調整不明	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内10YR7/2 にぶい黄橙色～10YR5/1 褐灰 色 外10YR7/3 にぶい黄橙色	
83	土師器	杯	大溝下層	①(15.0) ②1.85 ③11.0	底部外面ヘラ切り後ナデ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内5YR8/3 淡橙色～5YR7/2 明褐灰色 外 10YR8/3 浅黄橙色	
84	土師器	杯	大溝下層 (青黒色砂層)	①(14.5) ②<2.55	底部外面ヘラ切り 底部内面ヨコナデ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外7.5YR7/4 にぶい橙色～5YR6/6 橙色	
85	土師器	杯	大溝下層	①(17.0) ②2.5	底部外面ヘラ切り 他は調整不明	A：微細な白色砂粒を含む B：やや良好 C：内7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR7/1 灰白 色 外5YR8/2 淡橙色	
86	土師器	杯	大溝下層	①(15.8) ②<2.1	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR8/2 灰白色	
87	土師器	杯	大溝下層	①(15.0) ②<2.7	内外面回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR8/2 灰白色～7.5YR6/6 橙色	
88	土師器	丸底杯	大溝下層	①(15.2) ②<3.55	底部外面ヘラケズリ？ 体部外面上位指オサエ 他は回転ナデ	A：1mm 以下の白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR7/2 灰白色～10YR7/3 にぶい黄 橙色	
89	土師器	椀	大溝下層	②<2.1 ④9.5	外面回転ナデ 内面回転ナデ後ミガキカ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内2.5Y5/1 黄灰色 外10YR8/1 灰白色	
90	土師器	鉢	大溝下層	①(21.0) ②<3.7 ③(13.0)	内外面回転ナデ	A：2mm 以下の白色砂粒・長石を含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色	
91	土師器	鉢	大溝下層	①(24.1) ②<4.9	内外面ヨコナデ 体部外面上位～中位指オサエ	A：微細な白色砂粒・雲母を多く含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色～10YR6/6 明黄褐色	
92	土師器	鉢	大溝下層	①(23.4) ②7.75 ③(15.2)	体部外面下位指オサエ 体部内面下位ナデ・指オサエ 他はヨコナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色～ N7/ 灰白色	
93	土師器	鉢	大溝下層	①(25.0) ②<7.8	内外面ヨコナデ 体部外面下位指オサエ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色～10YR7/4 にぶい黄 橙色	
94	土師器	鉢	大溝下層	②<1.3	底部内外ナデ	A：3mm 以下の白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色	
95	土師器	高台付鉢	大溝下層	②<6.2 ④(15.4)	内外面回転ナデ 体部外面下位工具痕あり	A：4mm 以下の白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：内外10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐灰色	被熱あり
96	土師器	甕	大溝下層	②<5.45	体部内外面ナデ 体部内面指オサエ 口縁部外面ヨコナデ	A：3mm 以下の白色砂粒を多く含む B：良好 C：内2.5Y7/1 灰白色 外2.5Y7/1 灰白色～ 2.5Y7/2 灰黄色	
97	土師器	甕	大溝下層	②<6.8	内外面ヨコナデ 体部外面上位指オサエ	A：3mm 以下の白色砂粒・長石・雲母を多く 含む B：良好 C：内7.5YR7/3 にぶい 橙色～ 7.5YR3/2 黒褐色 外7.5YR1.7/1 黒色	煤付着
98	土師器	鉢	大溝下層 (青黒色砂層)	②<3.2	内外面回転ナデか	A：2mm 以下の長石類を含む B：やや不良 C：内外2.5YR8/2 灰白色	
99	土師器	甕	大溝下層	②<4.85	外面ナデ 内面ヨコナデ 体部外面下位指オサエ	A：2mm 以下の白色砂粒・雲母を多く含む B：良好 C：内10YR7/2 にぶい黄橙色～10YR3/1 黒褐 色 外7.5YR8/3 浅黄橙色～7.5YR5/1 褐灰色	内外面煤付着
100	土師器	甕	大溝下層	②<6.85	内外面回転ナデ	A：2mm 以下の白色砂粒・雲母を多く含む B：良好 C：内10YR3/1 黒褐色 外7.5YR7/3 にぶい橙 色	内面煤付着
101	土師器	把手	大溝下層	②<4.5	ナデ成形 上面一部ケズリ	A：2mm 以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B：良好 C：内外10YR7/2 にぶい黄橙色～5YR6/4 に ぶい橙色	瓶か？
102	土師器	脚	大溝下層	②<3.1	ナデ成形 下面ハケ状工具痕あり	A：2mm 以下の白色砂粒を含む B：良好 C：内外10YR8/1 灰白色	椀につくものか？
103	瓦質土器	盤	大溝下層	①(22.5) ②6.65 ③(18.4)	底部外面調整不明 他はミガキ	A：1mm 以下の白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内7.5YR7/1 明褐灰色～7.5YR1.7/1 黒色 外10YR7/3 にぶい黄褐色～10YR1.7/1 黒色	
104	瓦器	椀	大溝下層	②<1.8 ④(6.8)	外面回転ナデ 内面ミガキ	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内 N3/ 暗灰色 外 N4/ 灰色	

第6表 第4次調査出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)			
105	瓦器	椀	大溝下層	②<1.75> ④(6.0)	底部外面回転ナデ 他はミガキ	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内2.5Y6/1 黄灰色～N4/ 灰色 外N6/ 灰色～N4/ 灰色	
106	瓦器	椀	大溝下層	②<3.0> ④(6.2)	底部外面ナデ 他はミガキ	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内外N3/ 暗灰色	
107	瓦器	椀	大溝下層	②<2.9> ④5.8	内外面回転ナデ 体部外面下位指オサエ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内10YR7/2 にぶい黄褐色 外5Y6/1 灰色	
108	瓦器	椀	大溝下層 (青黒色砂層)	②<3.7> ④(8.2)	内外面ミガキ?	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内7.5YR2/1 黒色～7.5YR5/1 褐灰色 外7.5YR5/1 褐灰色～7.5YR3/1 黒褐色	
109	瓦器	椀	大溝下層	①(16.6) ②<5.0>	底部内面～体部外面下位指オサエ 体部内面～体部外面上位ミガキ 体部内面一部指オサエ	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内外2.5Y8/1 灰白色～2.5Y4/1 黄灰色	
110	瓦器	椀	大溝下層	①15.9 ②6.0 ④6.6	体部外面下位～底部外面回転ナデ 他はミガキ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内10YR3/2 黒褐色～10YR1.7/1 黒色 外2.5Y7/1 灰白色～2.5Y3/1 黒褐色	外面重ね焼き痕あり
111	瓦器	椀	大溝下層	①(16.0) ②5.3 ④6.4	底部外面回転ナデ 他はミガキ	A：微細な白色砂粒を少量含む B：良好 C：内N5/ 灰色～N3/ 暗灰色 外5PB4/1 暗青灰色～N5/ 灰色	焼き歪みが著しい 内面重ね焼き痕あり
112	瓦器	杯	大溝下層	②<1.8>	底部外面ナデ 他はミガキ	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内10YR2/1 黒色 外10YR2/1 黒色～10YR4/1 褐灰色	
113	白磁	椀	大溝下層	①(16.0) ②<4.7>	内面～体部外面下位施釉 体部外面回転ヘラケズリ	A：精良 B：良好 C：釉10YR8/1 灰白色 胎土・露胎7.5Y8/2 灰白色	太宰府分類Ⅳ類
114	白磁	椀	大溝下層	①(17.0) ②<5.0>	内面～体部外面下位施釉 体部外面下位回転ヘラケズリ	A：精良 B：良好 C：釉2.5GY8/1 灰白色 胎土5Y8/1 灰白色 露胎10YR7/1 灰白色	白磁椀Ⅳ類
115	白磁	椀	大溝下層	①(17.0) ②<5.1>	内面～体部外面中位施釉 体部外面下位回転ヘラケズリ	A：精良 B：良好 C：釉2.5GY8/1 灰白色 胎土5Y8/1 灰白色 露胎10YR7/1 灰白色	白磁椀Ⅳ類
116	白磁	椀	大溝下層	①(15.2) ②6.7 ④5.5	内面～体部外面中位施釉 体部外面回転ヘラケズリ 体部内面中位一条の沈線が 巡る 削り出し高台	A：精良 B：良好 C：釉5Y7/1 灰白色 胎土5Y6/1 灰色	白磁椀Ⅴ-2類
117	白磁	椀	大溝下層 (青黒色砂層)	②<2.1>	内外面施釉	A：精良 B：良好 C：釉・胎土5Y7/1 灰白色	白磁椀Ⅴ-3類
118	白磁	椀	大溝下層	②<1.3>	内外面施釉	A：精良 B：良好 C：釉5Y6/2 灰オリーブ色 胎土5Y8/1 灰白色	小片のため時期・ 産地不明
119	白磁	椀	大溝下層	②<2.4>	内外面施釉 外面鏡書き	A：精良 B：良好 C：釉5GY8/1 灰白色 胎土5Y8/1 灰白色	白磁椀Ⅴ-2類
120	白磁	椀	大溝下層 (青黒色砂層)	②<1.9> ④6.4	内面施釉 体部外面ヘラケズリ	A：精良 B：良好 C：釉・胎土5Y7/2 灰白色	太宰府分類Ⅳ類
121	瓦	平瓦	大溝下層	残存長9.3 最大幅9.1 最大厚2.2	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A：2mm 以下の白色砂粒を多く含む B：不良 C：凸凹面7.5YR7/3 にぶい橙色	
122	瓦	平瓦	大溝下層	残存長12.5 最大幅7.0 最大厚2.0	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A：2mm 以下の白色・黒色砂粒を多く含む B：やや軟質 C：凸面7.5YR8/4 浅黄橙色～7.5YR7/1 明褐灰色 凹面10YR8/3 浅黄褐色	
123	瓦	平瓦	大溝下層	残存長11.5 残存幅9.25 厚さ2.15	凸面斜格子目痕 凹面布目痕・ケズリ	A：5mm 以下の小石、微細な白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：凸凹面7.5YR8/3 浅黄褐色～7.5YR6/2 灰褐色	
124	瓦	丸瓦	大溝下層	残存長11.5 最大幅7.8 最大厚2.0	凸面ヨコナデ 凹面布目痕一部指オサエ	A：2mm 以下の白色・黒色砂粒・長石類を多く含む B：良好 C：凸面5YR5/4 にぶい赤褐色～5YR6/1 褐灰色凹面7.5YR7/3 にぶい橙色	
125	瓦	丸瓦	大溝下層	残存長12.6 最大幅14.0 最大厚2.8	凸面ヨコナデ 凹面不定方向ナデ・布目痕	A：3mm 以下の長石類を多く含む B：良好 C：凸凹面10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐灰色	
126	瓦	丸瓦	大溝下層	残存長12.7 最大幅14.8 最大厚1.5	凸面格子目痕 凹面布目痕 凹面下部工具痕あり	A：3mm 以下の長石類を多く含む B：良好 C：凸凹面7.5YR7/2 明褐灰色～7.5YR6/1 褐灰色～N6/ 灰色	
127	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長11.3 最大幅4.3 厚さ3.35	ナデ成形	A：3mm 以下の白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：内外10YR7/3 にぶい黄褐色～10YR7/1 灰白色	表面還元瓦質
128	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長10.6 最大幅4.3 厚さ2.8	ナデ成形一部指オサエ	A：4mm 以下の白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：10YR8/1 灰白色～10YR7/1 灰白色	表面還元
129	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長8.25 最大幅4.7 厚さ3.2	ナデ成形	A：4mm 以下の白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：10YR8/2 灰白色～10YR7/1 灰白色	
130	土製品	棒状土製品	大溝下層 (青黒色砂層)	残存長14.7 最大幅5.0 最大厚3.6	調整不明	A：微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内外10YR8/3 浅黄褐色	

第7表 第4次調査出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
131	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長9.7 幅4.2 厚さ3.0	ナデ成形	A:4mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:2.5Y7/2 灰黄色~2.5Y7/1 灰白色	表面還元
132	土製品	棒状土製品	大溝下層 (青黒色砂層)	残存長8.2 幅4.8 厚さ3.6	調整不明	A:3mm以下の長石・石英類多くを含む B:良好 C:内外10YR6/1 褐灰色	全体還元
133	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長8.6 幅5.3 厚さ4.2	調整不明	A:5mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:10YR8/3 浅黄橙色~10YR7/1 灰白色	表面還元
134	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長7.9 幅4.2 厚さ3.2	3面ナデ成形 1面調整不明	A:5mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:5Y6/1 灰色	全体還元
135	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長10.9 幅4.65 厚さ4.3	3面ナデ成形 1面調整不明	A:5mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:10YR8/2 灰白色~10YR7/1 灰白色	
136	土製品	棒状土製品	大溝下層	残存長6.5 幅3.8 厚さ3.7	ナデ成形一部指オサエ	A:5mm以下の白色砂粒・長石・角閃石・雲母を多く含む B:良好 C:10YR8/1 灰白色	
137	土師器	鈴形土製品	大溝下層	②<2.1>	ナデ成形 穿孔あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外5YR6/6 橙色~5YR5/1 褐灰色	
138	土製品	土玉	大溝下層	長さ1.8 幅1.5 厚さ1.8	ナデ成形	A:微細な砂粒を含む B:良好 C:2.5Y7/1 灰白色	
139	土師器	把手?	大溝下層	②<2.85>	指オサエ 握って成形か	A:2mm以下の白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内外10YR6/1 褐灰色	
140	土師器	器台?	大溝下層	②<9.2> ③<6.1>	指オサエ成形 外面ハケ状工具痕あり 内面調整不明	A:3mm以下の長石・石英を多く含む B:やや良好 C:内外10YR8/1 灰白色	
141	土製品	円形土製品	大溝下層(東区)	残存長6.6 最大幅7.0 厚さ0.5	指オサエ成形?	A:2mm~5mmの長石・石英を含む B:良好 C:裏面5YR5/1 褐灰色 側面10YR8/3 浅黄橙色~10YR6/2 灰黄褐色	穿孔あり 煤付着? 円形か?
142	土製品	窯壁?	大溝下層	残存長4.0 残存幅4.25 厚さ1.7	ナデ	A:3mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:10YR8/2 灰白色~10YR5/1 褐灰色	スサが混じる 煤付着
143	土製品	円形土製品	大溝下層	残存長6.6 最大幅9.45 最大厚4.4	指オサエあり	A:2mm以下の白色砂粒を多く含む B:良好 C:10YR6/1 褐灰色	
144	瓦質土器	不明製品	大溝下層	②<4.25> 最大幅17.05 最大厚1.8	外面ヨコハケ・指オサエ 内面指オサエ・ナデ	A:4mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:内外5Y6/1 灰色~5Y7/1 灰白色	
145	石製品	石鍋	大溝下層 (青黒色砂層)	①<18.8> ②<4.9>	内外面ケズリ		滑石製 外面煤付着
146	石製品	石鍋	大溝下層	残存長7.3 最大幅7.0 厚さ3.8	外面ケズリ 内面調整不明		滑石製 外面煤付着
147	石製品	パレン状石製品	大溝下層 (青黒色砂層)	全長6.4 幅6.1 厚さ2.4	上面ケズリ		滑石製 全面被熱による煤付着
148	木製品	木筒?	大溝下層	全長13.7 幅1.5 厚さ0.3			
149	獣骨	馬歯	大溝下層(東区)	全長5.7 幅2.9 厚さ1.75			
150	土師器	小皿	大溝埋土中 (炭の堆積層)	①<9.0> ②<1.3>	底部外面へラ切り? 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR7/2 にぶい黄橙色	底部外面板状圧痕あり
151	瓦器	椀	大溝埋土中 (炭の堆積層)	①<17.0> ②<4.5> ④<5.5>	内外面回転ナデか?	A:2mm以下の白色砂粒・長石を含む B:やや不良 C:内7.5YR6/1 褐灰色 外10YR6/1 褐灰色	焼け歪み著しい
152	瓦器	椀	大溝埋土中 (炭の堆積層)	②<3.8>	内面ミガキ 体部外面下位指オサエ	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内2.5Y7/1 灰白色~2.5YR3/1 黒褐色 外2.5Y7/1 灰白色~7.5YR6/4 にぶい橙色	焼け歪みあり
153	土師器	把手?	大溝埋土中 (炭の堆積層)	残存幅2.5 厚さ1.3	指オサエ成形	A:1mm以下の長石類を含む B:良好 C:内10YR8/1 灰白色~2.5YR7/6 橙色	
154	土師器	甕	大溝トレンチ内 一括	②<4.4>	内外面ヨコナデ	A:4mm以下の長石・石英を多く含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色 外10YR8/3 浅黄橙色~10YR3/1 黒褐色	外面煤付着
155	土師器	小皿	大溝トレンチ内 一括	①<9.0> ②<0.8> ③<6.8>	底部外面へラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母を含む B:良好 C:内10YR8/2 灰白色~10YR5/1 褐灰色 外10YR5/1 褐灰色	内外面煤付着
156	土師器	杯	大溝トレンチ内 一括	①<15.0> ②<3.0>	底部外面へラ切り 底部内面調整不明 他は回転ナデ	A:微細な白色・黒色・褐色砂粒・雲母を含む B:やや良好 C:内外10YR8/2 灰白色	底部穿孔あり
157	瓦器	椀	大溝トレンチ内 一括	①<17.2> ②<5.0> ④<6.0>	底部外面回転ナデ 他はミガキ 体部内面中位コテ当て痕あり	A:微細な白色砂粒を含む B:良好 C:内外7.5YR2/1 黒色~7.5YR6/6 橙色	

第8表 第4次調査出土遺物観察表⑤

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)			
158	土製品	棒状土製品	大溝トレンチ内一括	残存長10.0 最大幅4.15 厚さ3.0	調整不明ナデか?	A:4mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:N7/ 灰白色~7.5YR7/4 にぶい橙色	
159	土製品	棒状土製品	大溝トレンチ内一括	残存長21.5 幅4.8 厚さ3.3	ナデ成形	A:4mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B:良好 C:2.5Y7/1 灰白色~7.5YR7/3 にぶい黄褐色	全体瓦質
160	土製品	窯壁?	大溝トレンチ内一括	残存長5.4 幅4.6 最大厚3.65	ナデか	A:3mm以下の砂粒・長石を含む B:良好 C:10YR7/2 にぶい黄褐色~10YR5/4 にぶい黄褐色~10YR2/1 黒色	スサが混じる黒変あり
161	瓦	平瓦	大溝トレンチ内一括	残存長19.4 最大幅10.8 最大厚2.2	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:3mm以下の長石類を多量に含む B:良好 C:凸凹面 N7/ 灰白色~ N4/ 灰色	
162	瓦	平瓦	大溝トレンチ内一括	残存長18.3 最大幅14.0 厚さ2.0	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:4mm以下の白色砂粒・長石類を含む B:やや良好 C:凸凹面7.5YR6/2 灰褐色~ N4/ 灰色	
163	瓦	平瓦	大溝トレンチ内一括	残存長24.3 最大幅18.3 最大厚2.2	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:3mm以下の長石類を含む B:良好 C:凸面2.5Y7/1 灰白色~ N5/ 灰色 凹面5Y7/1 灰白色~ N3/ 暗灰色	歪みあり
164	瓦	平瓦	大溝トレンチ内一括	残存長19.35 最大幅19.1 最大厚2.7	凸面ハケメ痕 凹面布目痕	A:4mm以下の長石類を多量に含む B:やや不良 C:凸凹面7.5YR5/3 にぶい褐色~7.5YR4/1 褐灰色	
165	瓦	平瓦	大溝トレンチ内一括	残存長21.5 最大幅12.5 厚さ2.3	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:2mm以下の白色砂粒・長石類を含む B:不良 C:凸面10YR6/1 褐灰色~10YR6/4 にぶい黄褐色 凹面10YR5/1 褐灰色~10YR5/2 灰黄褐色	
166	瓦	平瓦	大溝トレンチ内一括	残存長15.0 最大幅18.0 最大厚2.3	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:3mm以下の長石類を多量に含む B:良好 C:凸凹面 N5/ 灰色	模骨痕あり?
167	瓦	丸瓦	大溝トレンチ内一括	残存長11.7 最大幅12.2 最大厚2.5	凸面斜格子目?痕一部ヨコナデ 凹面布目痕	A:2mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む B:やや軟質 C:凸面7.5YR7/1 明褐色~N4/ 灰色 凹面7.5YR7/1 明褐色~7.5YR6/1 褐灰色	
168	瓦	丸瓦	大溝トレンチ内一括	残存長24.9 最大幅14.3 厚さ2.0	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:2mm以下の長石類を含む B:やや軟質 C:凸面2.5Y7/1 灰白色 凹面2.5YR7/1 灰白色~10YR8/2 灰白色	
169	瓦	丸瓦	大溝トレンチ内一括	残存長11.05 最大幅11.6 最大厚2.0	凸面調整不明 凹面布目痕	A:3mm以下の白色砂粒・長石類を多く含む B:良好 C:凸面5Y6/1 灰色~5Y2/1 黒色 凹面5Y6/1 灰色	凸面ヘラ記号?あり 凸面煤付着
170	瓦	丸瓦	大溝トレンチ内一括	残存長22.5 幅18.1 厚さ2.1	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:3mm以下の長石類を含む B:やや良好 C:凸面2.5Y8/1 灰白色~10YR6/1 褐灰色~10YR3/1 黒褐色 凹面10YR7/2 にぶい黄褐色~10YR7/2 灰白色	凸面煤付着 凸面に窯屑のような付着物あり
171	瓦	丸瓦	大溝トレンチ内一括	残存長33.0 幅17.7 最大厚2.4	凸面斜格子目痕 凹面布目痕	A:2mm以下の白色砂粒・雲母を多く含む B:やや軟質 C:凸面10YR2/1 黒色~10YR7/1 灰白色 凹面10YR7/1 灰白色~10YR4/1 褐灰色	
172	須恵器	杯身	大溝 BTr	②<1.7> ④<9.0>	底部外面ヘラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:2mm以下の白色砂粒を含む B:良好 C:内外10YR7/1 灰白色	
173	須恵器	鉢	大溝 BTr 一括	②<3.0> ③<12.0>	底部外面糸切り 体部外面回転ナデ 内面調整不明	A:微細な白色・黒色砂粒、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内7.5YR2/1 黒色 外5Y7/1 灰白色	内面煤付着
174	土師器	丸底杯	大溝 BTr	①<14.0> ②<3.4>	底部外面ヘラ切り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A:微細な白色砂粒・雲母、3mm以下の長石を含む B:良好 C:内外7.5YR8/3 浅黄褐色	底部外面板状圧痕あり
175	白磁	椀	大溝 BTr	②<2.3>	内外面施釉	A:精良 B:良好 C:釉・胎土2.5Y8/4 淡黄色	
176	土製品	棒状土製品	大溝 BTr	残存長7.7 最大幅4.2 厚さ3.1	ナデ成形	A:4mm以下の長石・石英を含む B:良好 C:10YR5/1 褐灰色	
177	須恵器	杯身	大溝 CTr 一括	②<4.4> ④<8.7>	底部外面ヘラ切り 体部外面回転ナデ 内面調整不明 体部外面中位二条の沈線が巡る	A:3mm以下の白色・黒色砂粒を含む B:良好 C:内外 N3/ 暗灰色	内外面降灰 外面個別体付着
178	瓦器	椀	大溝 CTr 一括	①<16.7> ②<5.4> ④<6.0>	底部外面ヘラ切り後ミガキ 他はミガキ 体部内面コテ当て痕あり	A:微細な白色砂粒を少し含む B:良好 C:内外 N4/ 灰色	焼け歪みあり
179	弥生土器	甕	大型土坑北側小溝	②<7.0>	内外面ヨコナデ 刻目突帯貼付け	A:2mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B:良好 C:内10YR4/1 褐灰色 外10YR3/1 黒褐色	内外面煤付着
180	石器	剥片	遺構面検出	長さ5.5 最大幅4.1 厚さ0.6 重さ14.0g			安山岩製
181	青磁	椀	表土剥ぎ	②<5.15>	内外面施釉 内面草花文	A:精良 B:良好 C:釉5Y5/2 灰オリーブ色 胎土5Y8/2 灰白色	龍泉窯系椀I類

第9表 第4次調査出土遺物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm・g)	形態・技法・文様の特徴	A：胎土 B：焼成 C：色調	備考
				①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)			
182	須恵器	杯蓋	大型土坑	①14.9 ②3.75	天井部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A：1mm以下の白色砂粒・黒色粒を含む B：良好 C：内外2.5Y7/1 灰白色～10YR7/2 にぶい黄橙色	
183	須恵器	杯身	大型土坑上層	①(10.1) ②4.0 受部径(13.0)	底部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A：3mm以下の白色砂粒を多く含む B：良好 C：内N7/ 灰白色 外N7/ 灰白色 ～5Y7/1灰白色	外面別個体付着・ 重ね焼き痕あり 外面降灰
184	須恵器	杯身	大型土坑最下層	①(11.4) ②3.15 受部径(14.25)	底部外面回転ヘラケズリ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒・褐色粒を含む B：良好 C：内外N7/ 灰白色～N4/ 灰色	歪みが著しい 内面重ね焼き痕あり
185	須恵器	甕	大型土坑下層	②(24.6) ⑤(24.8)	体部外面平行タキ後カキメ 体部内面同心円文当て具痕 他は回転ナデ	A：3mm以下の白色砂粒・長石を含む B：良好 C：内10YR8/2 灰白色 外10YR7/3 にぶい黄橙色	外面自然釉粘着
186	須恵器	甕	大型土坑下層一 括	①22.8 ②34.2 ⑤31.0	体部外面擬格子タキ後一 部カキメ 体部内面同心円文当て具痕 他は回転ナデ	A：2mm以下の白色砂粒・黒色粒を含む B：良好 C：内外N7/ 灰白色～N6/ 灰色	
187	土師器	甕	大型土坑下層	①(14.0) ②(4.95)	体部外面ハケメ 体部内面ハケメ・ケズリ 他はヨコナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内10YR7/2 にぶい黄橙色 外 10YR8/1 灰白色～10YR5/1 褐灰色	体部外面黒斑あり
188	土師器	甕	大型土坑最下層	②(8.3) ③12.1	外面ハケメ 内面ケズリ	A：3mm以下の白色砂粒・長石・石英を多く 含む B：良好 C：内10YR8/2 灰白色 外10YR6/3 にぶい黄橙色～10YR3/1 黒褐色	
189	土師器	小皿	大型土坑 埋土最下層	①(8.0) ②1.2 ③(6.4)	底部内外面ナデ 他は回転ナデ	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外10YR8/3 浅黄橙色～7.5YR6/4 にぶい 橙色	
190	弥生土器	甕	大型土坑下層	②(9.15)	頸部外面ナデ 他はハケメ	A：3mm以下の白色砂粒・長石を含む B：良好 C：内10YR8/2 灰白色 外10YR7/3 にぶい黄橙色	
191	弥生土器	甕	大型土坑下層	②(1.7) ③(7.9)	内外面ナデー一部ヨコナデ	A：4mm以下の長石、微細な白色砂粒を含む B：良好 C：内10YR7/3 にぶい黄橙色 外 7.5YR7/4 にぶい橙色～7.5YR3/1 黒褐色	
192	土師器	甕	大型土坑最下層	②(2.3) ③5.2	外面ナデ 内面ケズリ	A：3mm以下の白色砂粒・長石・雲母を多く 含む B：良好 C：内10YR6/1 褐灰色 外10YR7/2 にぶい黄橙色～7.5YR6/6 橙色	
193	土師器	甕	大型土坑最下層	②(3.6) ③3.85	内面ケズリ 底部外面ナデ 体部外面下位タキ	A：3mm以下の白色砂粒・長石を多く含む B：良好 C：内10YR8/1 灰白色 外10YR8/2 灰白色～10YR4/1 褐灰色	外面黒斑あり
194	土師器	高杯	大型土坑 ベルト内	②(4.95) 頸部径3.2	外面ヨコナデ 杯部内面不定方向ナデ 脚部内面シボリ痕あり	A：微細な白色砂粒・雲母を含む B：良好 C：内外2.5Y4/1 黄灰色	全面煤付着
195	土師器	高杯	大型土坑下層	②(3.2) 脚部径(10.9)	脚部外面下位ハケメ 脚部内面シボリ痕あり 三方向透かし	A：2mm以下の白色砂粒・長石を含む B：良好 C：内10YR8/2 灰白色 外10YR8/2 灰白色～7.5YR5/6 明褐色	
196	土師器	高杯	大型土坑中層	②(12.5) 頸部径4.0	内外面調整不明 内面シボリ痕あり	A：2mm以下の白色砂粒・長石・雲母を含む B：良好 C：内外10YR7/3 にぶい黄橙色	
197	弥生土器	器台	大型土坑	②(14.7)	外面ハケメ後一部指オサエ 内面上位ナデ 内面シボリ痕あり	A：5mm以下の白色砂粒・長石・石英・雲母 を多く含む B：良好 C：内7.5YR7/3 にぶい橙色 外 5Y6/4 にぶい橙色～5YR5/6 明赤褐色	
198	白磁	椀	大型土坑 埋土中層	②(2.2) ④(6.9)	内面施釉 削り出し高台	A：精良 B：良好 C：釉2.5GY8/1 灰白色 胎土10YR8/2 灰色	
199	青磁	椀	大型土坑 埋土最下層	②(3.45)	内外面施釉 内面片彫文	A：精良 B：良好 C：釉7.5Y5/2 灰オリーブ色 胎土7.5YR7/1 灰白色	龍泉窯系椀Ⅰ類 内外面貫入
200	石製品	石包丁	大型土坑中層 (赤色粘質土)	残存長5.1 残存幅7.9 厚さ0.7 孔径0.5 重さ35.9g	両面研磨		粘板岩製 穿孔あり
201	石器	石鏃	大型土坑埋土中	長さ1.95 幅1.5 厚さ0.2 重さ0.4g			黒曜石製
202	鉄製品	鉄滓	大型土坑埋土中	②(2.75) 残存幅3.4 厚さ2.2 重さ22.8g			

IV. まとめ

1. 中世大和村について

ここで、今回報告を行った上園遺跡第3・4次調査の調査成果や周辺遺跡の調査状況を基に、中世大和村についてまとめてみたい。

上園遺跡周辺の中世遺跡で、まず注目されるのが①上大和小水城跡の北側50mで調査された小水城周辺遺跡で確認されたSD04である。この溝は調査区の東側で確認された南北方向にのびる溝であり、出土遺物より11世紀後半～12世紀前半と考えられる。湧水は著しく、地形的にSD04は東側の最も低い所に位置し、旧河道ではないかと考えている。①上大和小水城跡の調査においても、第2次調査3・6・7トレンチや第3次調査1トレンチで、植物質を多く含む腐植土層が確認されていることも傍証となる。また、小水城跡が塞ぐ小さな谷を北流する平田川は、上大和小水城跡の南側で西に向きを変えている。上大和小水城跡の調査結果を踏まえると地形的には西側が高いことから、本来の②平田川は谷の東側を流れており、11世紀後半～12世紀前半に付け替えられたのではないかと考えられる。

この時期、上園遺跡では掘立柱建物や井戸などが確認され、③集落が成立する。第7次調査では、削り抜きの木製井戸枠を伴う井戸(SE01)や屋敷を囲うような溝(SD09～11)も確認されている。また、第4次SD01からは焼き歪んだ瓦器や棒状土製品が出土しており、集落の一角には④瓦器焼成窯を伴っていたと考えられる。第3次調査で確認されたSP17が瓦器製作にともなうロクロピットであったとすれば、⑤瓦器製作工房も上園遺跡の集落の中にあると考えてよい。

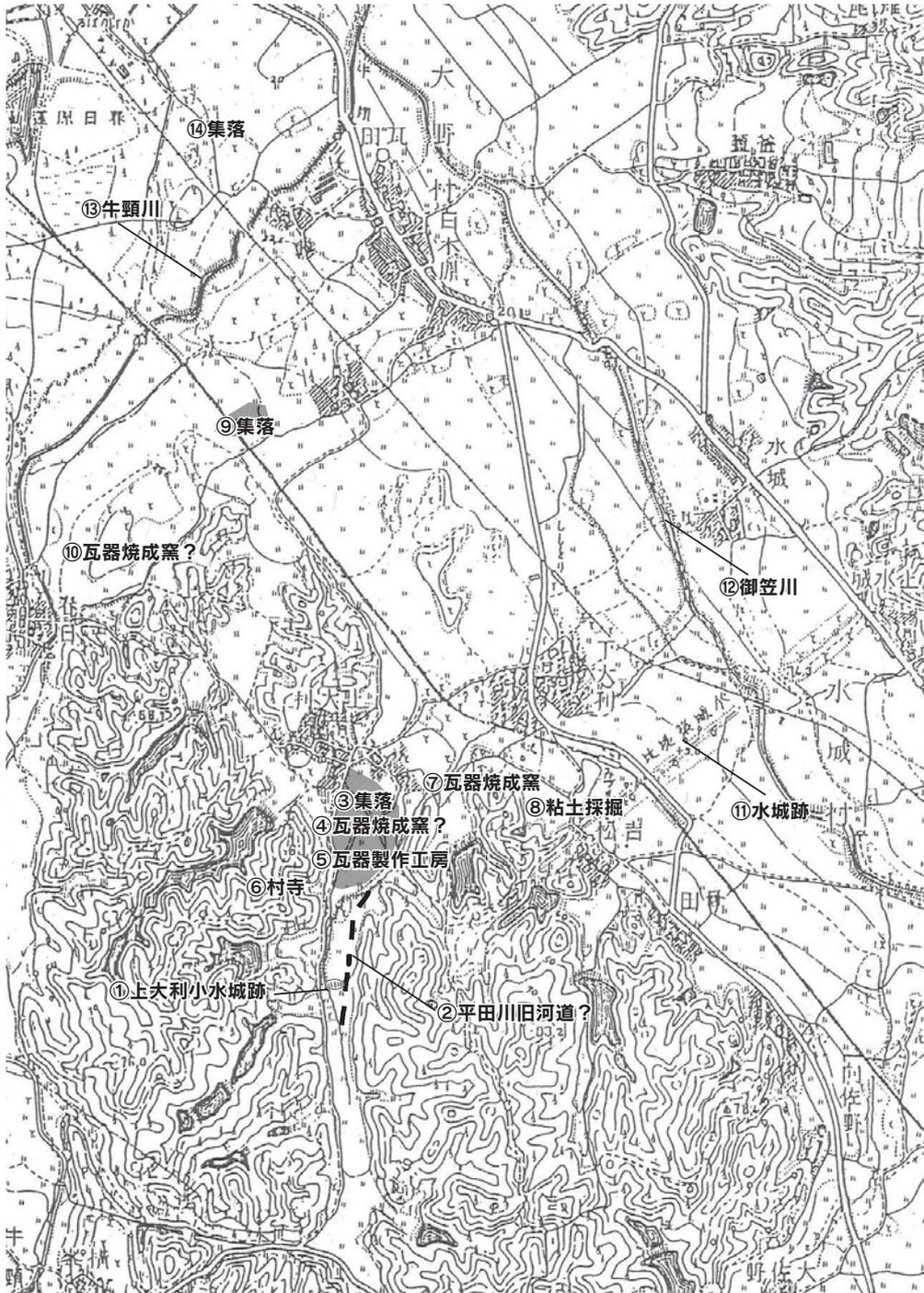
隣接する本堂遺跡第10次調査では、丘陵斜面を開削して作られた平坦面にこの時期の掘立柱建物が確認され、斜面下方の第7次調査谷部からは呪符木簡や「大日如来」と墨書される丸底杯などから⑥村寺があったものと考えられる。谷部からはおびただしい量の土師器小皿・杯をはじめ大量の遺物が出土しており、法会・神事が行われたのであろう。

上園遺跡からは土師器のほかに中国産磁器に加え、高麗青磁も確認され、その入手に当たっては博多との関わりを考えておかなければならない。さらに上園遺跡東側にある天神田遺跡では、丘陵上にこの時期の⑦瓦器焼成窯が確認され、水城跡西門前面部の38次SX205では⑧粘土採掘が行われ、12世紀代にあるとされている。

このように、上園遺跡周辺では11世紀後半～12世紀前半に著しい遺跡の広がりが認められるが、いずれの調査地においても明確に13世紀代まで下る遺構はなく、極めて短期間に盛衰する。上園遺跡のある大和地域の再開発は、観応3年(1352)の『安楽寺領注進状写』や上大和老松神社の存在から、安楽寺が果たしたものと考えられる。また、『筑前国統風土記』には「大和、白木原は元一村ナリ」と書かれており、御供田遺跡を中心とする⑨集落や西側の⑩瓦器焼成窯は、上園遺跡とはほぼ同じ時期に出現する。大和村の範囲は、南は①上大和小水城跡、東は⑪水城跡と考えられるが、これが御供田遺跡⑨集落を含み北は⑫御笠川、西は⑬牛頸川まで広がっていたのか。今後、調査研究を進めていく必要がある。

[参考文献]

- 大野城市教育委員会1995『小水城周辺遺跡Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第45集
 大野城市教育委員会2008『牛頸本堂遺跡群Ⅶ』大野城市文化財調査報告書第81集
 九州歴史資料館2009『水城跡—上巻—』
 大野城市教育委員会2014『上園遺跡3』大野城市文化財調査報告書第121集
 大野城市教育委員会2016『上大利小水城跡』大野城市文化財調査報告書第147集
 大野城市教育委員会2017『天神田遺跡1』大野城市文化財調査報告書第149集
 大野城市教育委員会2020『上大利小水城跡2』大野城市文化財調査報告書第180集
 九州大学埋蔵文化財調査室2021『九州大学筑紫キャンパス内遺跡群（御供田遺跡）総括報告書2』九州大学埋蔵文化財調査室報告第6集
 大野城市教育委員会2021『御供田遺跡5』大野城市文化財調査報告書第190集



第29図 大野城市大利地域の中世集落

圖 版



(1) 第3次調査地東半部全景 (南西から)



(2) 第3次調査地西半部全景 (北東から)



(1) 第3次 SC05完掘状況 (南西から)



(2) 第3次 SD14・15完掘状況 (南西から)



(1) 第3次 SP17土層断面 (南東から)



(2) 第3次 SP17完掘状況 (南東から)

図版4



(1) 第3次 SX06完掘状況 (北西から)



(2) 第3次 SP69検出時遺物出土状況 (南東から)



(1) 第3次調査前現況 (南西から)



(2) 第3次調査風景 (北東から)



(1) 第4次調査地北半部全景 (南から)



(2) 第4次調査地南半部全景 (北から)



(1) 第4次 SD01土層 (南から)



(2) 第4次 SX01完掘状況 (東から)

图版8



第3次調査出土遺物①

第4次調査出土遺物①



162



170



186



163



171



201



168



182



桃の種子



168破断面



184



丸瓦125・168接合状況



報告書抄録

ふりがな	かみのそのいせき
書名	上園遺跡10
副書名	～第3・4次調査～
巻次	
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第198集
編著者名	石木 秀啓
編集機関	大野城市教育委員会
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1
発行年月日	2022/3/31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのその 上園遺跡	福岡県 大野城市 上大利 4丁目 125-1・10	402192		33° 30' 56"	130° 28' 54"	1987/4/10 ～5/18	329㎡	住宅建設
かみのその 上園遺跡	福岡県 大野城市 上大利 4丁目126-1	402192		33° 33' 59"	130° 28' 54"	1987/7 ～8	380㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上園遺跡第3次調査	集落等	古墳時代、 平安時代	溝 土坑 ピット	須恵器・土師器・土師質土器・瓦器・輸入陶磁器・鉄器	平安時代の溝・土坑が確認された。ピットの中には土器製作に関わる可能性のあるものが確認された。
上園遺跡第4次調査	集落等	古墳時代、 平安時代	溝 土坑 ピット	須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・瓦・輸入陶磁器・土製品・馬歯	古墳時代の土坑と平安時代溝が確認された。溝からは、瓦器焼成に関わると考えられる遺物が出土した。
要約	古墳時代と平安時代の遺構が確認された。中世の大利村の一部と考えられる。古墳時代の遺構や遺物には、須恵器窯跡で使われた焼台が含まれており、牛頸窯跡群の操業に関わる工人集落であったことが確認できた。平安時代の遺構には、土器製作に関わる可能性のあるピットが確認された。また瓦器焼成に関わる遺物も確認され、近辺に瓦器焼成窯が存在するものと考えられる。				

大野城市文化財調査報告書第198集

上園遺跡10

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷
〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号